本庄市埋蔵文化財調査報告書　第68集　秋山諏訪平遺跡Ⅴ　―Ｈ地点の調査―

二〇二二　東京電力パワーグリッド株式会社　本庄市教育委員会

秋山諏訪平遺跡Ⅴ

―Ｈ地点の調査―

2022

本庄市教育委員会
東京電力パワーグリッド株式会社

秋山諏訪平遺跡Ⅴ

あきやますわだいらいせき

－Ｈ地点の調査－

2022

本庄市教育委員会
東京電力パワーグリッド株式会社

序

埼玉県北西部に位置する本庄市は、明治時代に建築された競進社模範蚕室や旧本庄商業銀行煉瓦倉庫に代表されるような養蚕・製糸業の生産・流通の拠点であり、また、江戸時代の国学者である塙保己一を輩出するなど、多彩な文化的背景を持つ自治体として知られています。遺跡や遺物などの埋蔵文化財についても、本市は質・量ともに豊かな内容を持っており、それぞれの時代や地域においての歴史像を紡げるような、調査・研究の蓄積がなされてきました。

ここに報告する秋山諏訪平遺跡は、児玉町秋山地区の「諏訪山」と呼ばれる丘陵の裾に広がる、古墳時代後期を盛期とし、奈良・平安時代まで営まれた集落の一つです。北に面する眼下には、美里町広木大町古墳群が広がり、背後の諏訪山丘陵上には全長約60mの規模を誇る前方後円墳、秋山諏訪山古墳が控え、西方には、二重の周溝を持つ直径34mの円墳、秋山庚申塚古墳を始めとする秋山古墳群がさらに西へと展開しています。また、本遺跡の北西に近接する秋山大町遺跡ならびに秋山大町東遺跡も、同時期に営まれた集落であり、本報告の調査成果を合わせ、これまでに発掘調査された竪穴住居跡の数は400軒を超え、本遺跡周辺は市内において大規模な集落を形成した代表的な地域の一つと言えるでしょう。

本書に収載された貴重な埋蔵文化財は、ここに記録として保存し、発掘調査報告書という形で後世へと伝えることになりました。これらの埋蔵文化財は、私たちはもとよりこれから本庄市に生まれ育っていく子どもたちにとっても、地域の歴史理解の一助となるものであり、大切に守り伝えていかなければならないものです。

ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、ひとえに東京電力パワーグリッド株式会社をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご理解とご協力の賜と深く感謝申し上げます。このささやかな調査報告書は、埋蔵文化財の保護・活用にとっての第一歩であるに過ぎませんが、この地域の住民皆様はもとより教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

令和４年３月

本庄市教育委員会
教育長　勝山　勉

例　言

1．本書は、埼玉県本庄市児玉町秋山字大町 669 － 1、670 － 1 の一部に所在する秋山諏訪平遺跡Ｈ地点（遺跡番号№ 54-044）の発掘調査報告書である。

2．秋山諏訪平遺跡に関する発掘調査報告書は、これまでに以下の４冊が刊行されている。本書は５冊目の報告書となることから『秋山諏訪平遺跡Ⅴ』とした。また秋山諏訪平遺跡は調査地点ごとに呼称が定められており、本書所収となる地点は秋山諏訪平遺跡Ｈ地点と呼称する。

『秋山諏訪平遺跡―Ｃ地点の調査―』（2007）
『秋山諏訪平遺跡Ⅱ―Ｂ地点の調査―』（2010）
『秋山大町東遺跡　秋山諏訪平遺跡Ⅲ―Ｄ・Ｅ・Ｆ地点の調査―』（2010）
『秋山諏訪平遺跡Ⅳ―Ｇ地点の調査―』（2012）

3．発掘調査の目的・期間・対象面積・調査機関・調査担当は、以下の通りである。

調査目的：東京電力パワーグリッド株式会社が計画した変電所新設工事に伴う事前の記録保存
調査期間：令和３年 10 月４日～ 12 月 21 日
対象面積：1,336㎡
調査機関：本庄市教育委員会
調査担当：大熊季広・的野善行・福岡佑斗（本庄市教育委員会）
調査支援：坂下貴則（株式会社東京航業研究所）
測量担当：白尾 司　奈治原亮年　鈴木智之　樫尾哲夫（株式会社東京航業研究所）

4．発掘調査および整理・報告書刊行に至る経費は、東京電力パワーグリッド株式会社が負担した。

5．遺物整理及び報告書の作成は、本庄市教育委員会の指導に基づき、株式会社東京航業研究所が令和３年 12 月 22 日から令和４年３月 29 日まで行った。

6．本書の執筆は、第Ⅰ章第１節を本庄市教育委員会事務局、第Ⅳ章（２）編物石を小森暁生、遺物観察表を岩本多恵子、それ以外を坂下貴則が行った。

7．本書の編集は、坂下貴則（株式会社東京航業研究所）が行った。

8．本書に関する出土品・図面・デジタルデータ等の資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。

9．本書にかかる発掘調査、整理作業および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下の通りである。

主体者	本庄市教育委員会	
	教育長	勝山　勉
事務局	事務局長	高橋　利征
	文化財保護課	
	課　　長	佐々木智恵
	課長補佐	細野　房保
	課長補佐	山田　修
	埋蔵文化財係長	大熊　季広
	主　　査	的野　善行
	主　　事	水野　真那
	主　　事	福岡　佑斗
	主事補	松浦　誠
	専門員	徳山　寿樹
	会計年度任用職員	中嶋　淳子・矢内　勲・新井　嘉人・栗原　正実・倉林　美紀・渋谷　裕子・星野八重子・落合智恵美・黒澤　恵

10．発掘調査及び本書作成にあたり、以下の方々や諸機関からご協力頂いた。記して感謝致します（順不同・敬称略）。

酒井清治・藤野一之・関口信夫・クリスティアン ライペ・平野哲也・大谷 徹

深谷市教育委員会・美里町教育委員会・上里町教育委員会・神川町教育委員会・

埼玉県教育局市町村支援部 文化資源課

凡　例

・本書の各挿図に記した方位針は座標北を示している。

・本書のＸ・Ｙ座標値は、世界測地系による国家標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯 36°00′00″、東経 139°50′00″）に基づく座標値を示し、単位はｍである。
　断面図に使用した数値は標高を示し、単位はｍである。

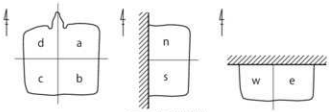
・グリッドの設定は、既報告を参考に８×８ｍを基本とした。表記は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット、西から東方向に数字を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称した。

・遺構には次の略号を使用した。また、遺構番号は、既報告（Ｂ～Ｇ地点）からの通し番号となるように集計され付されたものである。
　SI ＝竪穴住居跡（132 ～ 158 号）

・本書における挿図の縮尺は、全体図を１/300、遺構平面図・断面図を１/30・１/60・１/80、微細図を１/60 で掲載した。例外は図中に縮尺とスケールを示した。

・遺構の規模は、上端での計測値を原則としている。

・遺物観察表における各項目の内容は以下のとおりである。
　Ａ：法量（単位は cm または g とする。カッコ内は推定値を示す）
　Ｂ：成形
　Ｃ：整形・調整
　Ｄ：胎土・材質
　Ｅ：色調
　Ｆ：残存度
　Ｇ：備考
　Ｈ：出土位置（ａ～ｄ区、ｎ・ｓ・ｗ・ｅ区の表記は遺構覆土の大まかな出土位置を示す）



Ｈ：出土位置

・遺構断面図中のスクリーントーンは、それぞれの地山を示す。

・遺物の実測図の縮尺は１/４、破片資料は１/３で掲載した。表示は以下の通りである。

須恵器断面　黒色処理　煤

・本報告書で使用した地図は以下のとおりである。
　国土地理院　http://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html

目　次

序

例言

凡例

目次

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　発掘調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　第２節　発掘調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　第３節　整理作業の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第Ⅲ章　遺構と遺物
　第１節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第２節　住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
　第３節　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　56

第Ⅳ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　59

＜参考文献＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　62

写真図版

報告書抄録

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　発掘調査に至る経緯

令和３年４月 21 日（水）、本庄市児玉町秋山字大町６６９番１・６７０番１において、変電所の新設工事を計画している東京電力パワーグリッド株式会社より、同開発予定地に関する『埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて（照会）』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。

これを受けて、市教育委員会は、埼玉県教育委員会発行の『埼玉県遺跡地図』（令和２年度版）をもとに、同地が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しているか照会を行ったところ、照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である秋山諏訪平遺跡 (埼玉県遺跡番号 No.54 － 044) の包蔵地内に所在していることが判明した。

そのため、市教育委員会では、当該事業計画地について遺跡保存のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、令和３年６月１日（火）から９日（水）にかけて現地調査を実施した。

試掘調査の結果、事業予定地内にて保存対象となる埋蔵文化財として、古墳時代以降の竪穴住居跡と土坑、多数の土師器片が検出された。

この試掘調査の結果に基づいて、事業主と開発予定地に所在する埋蔵文化財の保存について協議を実施したが、計画変更等は困難であるため、事業予定地内において、埋蔵文化財が所在する範囲を発掘調査し、記録保存の措置をとることとなった。

かくして、令和３年７月２９日（木）に事業主の東京電力パワーグリッド株式会社と本庄市の間で遺跡発掘調査委託契約を締結し、現地における発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査に関わる通知は、事業主より文化財保護法第 93 条に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和３年４月２１日付）が、本庄市教育委員会より文化財保護法 99 条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」（令和３年８月３０日付本教文発１４２号）が、それぞれ埼玉県教育委員会に提出されている。

また、埼玉県教育委員会から、開発工事着工前に発掘調査を実施する旨の指示が記された「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（令和３年７月１４日付教文資第　４－７５４号）が事業主に通知されている。

なお、現地おける発掘調査は令和３年８月３０日（月）から同年 12 月 21 日（火）の日程で行われた。

（本庄市教育委員会事務局）

第２節　発掘調査の方法と経過

秋山諏訪平遺跡Ⅱ地点の発掘調査は、変電所建設に伴い実施した。調査面積は 1,336㎡である。

表土掘削は８月 30 日から９月 16 日まで重機を用いて行なった。その後 10 月４日から発掘作業を開始し、調査区南西部の台地斜面部から遺構確認を行って、重複関係のない竪穴住居跡から遺構精査に着手した。10 月８日に基準点測量を実施し、方眼杭の打設作業も行って本格的な遺構掘削を開始した。

遺構確認は、調査区の南西・北部の谷部から台地斜面部の南東部へと順次拡大するとともに、試掘調査時のトレンチを掘り下げて手がかりとした。検出した遺構は竪穴住居跡のみである。重複関係が明確なものは新規遺構から、重複関係が不明確なものは遺構の切り合い関係が記録できるように、順

次、遺構の精査を行い、土層断面図・平面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。

また、11月5日と12月8日には、原因者向けに現地説明会を実施した。

12月15日までに概ね全体を完掘し、清掃の上、12月17日に空中写真撮影を実施した。その後、遺構掘方などの調査を12月21日まで行って、調査を完了した。

第3節　整理作業の方法と経過

整理・報告書作成作業は、発掘調査と一部並行し、令和3年12月22日から3月29日まで実施した。出土遺物はコンテナ38箱分である。

発掘調査で記録した遺構の平面図や断面図はパソコンに取り込み、画像編集ソフトで遺構ごとにトレースした上で修正を加え、遺構の第二原図を作成した。また、第二原図に土層説明などを組み込んで印刷用の版下を作成した。発掘調査で撮影した遺構写真は、整理・選択して写真図版用の版下データを作成した。

出土遺物は、水洗・注記から開始した。注記は「秋山スワ平H　遺構番号　取上げ番号」である。水洗・注記ののち、接合が完了したものから、報告書掲載遺物を選別した。抽出した遺物は実測・トレース・拓本採取を行った。これらの原図をもとに、パソコンに取り込み、印刷用の挿図を作成した。また、写真図版用の遺物写真を撮影し、版下となるデータを編集・作成した。

2月から、作成した遺構・遺物のデータをもとに原稿執筆を開始した。執筆した原稿と、遺構・遺物の挿図・表・写真図版などを組み合わせて報告書の割付・編集を行い、3月に原稿を印刷業者に入稿・校正を経て刊行した。また、これに併せて、発掘調査の記録類と出土遺物は、整理・分類の上、本庄市教育委員会に収納した。

遺跡遠景（西から）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

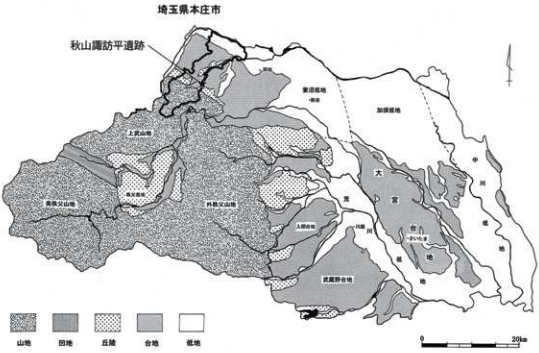
第１節　地理的環境

本庄市は埼玉県北西部に位置する。2006（平成18）年１月10日に旧本庄市と旧児玉町が合併し、人口約８万人の埼玉県北部の中心的な都市となった。市域は東西約17.2㎞、南北約17.3㎞、面積89.71㎢である。東を深谷市と美里町、西を神川町、南を皆野町と長瀞町、北西を上里町、また北は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接している。

本庄市の地形は、山地・丘陵・台地・低地を含み多様に展開している。本庄市域南西側には、八王子―高崎構造線に相当する断層崖を境に三波川系結晶片岩帯に相当する上武山地が位置し、この上武山地に接して第三紀層を基盤にもつ児玉丘陵が平野部に突出している。また、この児玉丘陵の延長上には、同じ第三紀の残丘である生野山・浅見山などの丘陵が点列状に存在している。一方、本庄市域北西側には、関東平野西端を構成する神流川扇状地が展開し、本庄台地とも呼ばれる。この扇状地中央部には、金鑽川と女堀川に開析された沖積低地が広がっている。

児玉丘陵の南側には、小山川を挟んで松久丘陵が展開し、北東方向に発達した扇状地内には天神川・志戸川水系の小河川によって開析された低地帯が広がっており、圃場整備以前には条里形地形が広域に認められたという。

本遺跡は、本庄市の児玉地域に位置し、児玉市街地から南東約2.5㎞の本市と美里町の市町境である児玉町秋山地区にあたり、利根川水系の小山川右岸に立地している。遺跡の範囲は、南の諏訪山と呼ばれる松久丘陵の一角を構成する残丘性の丘陵頂上付近から、北東側に諏訪平と呼ばれる台地に至る丘陵裾部に展開している。H地点は、標高94～92m前後の谷部へと至る丘陵の裾部に位置している。



第１図　秋山諏訪平遺跡の位置

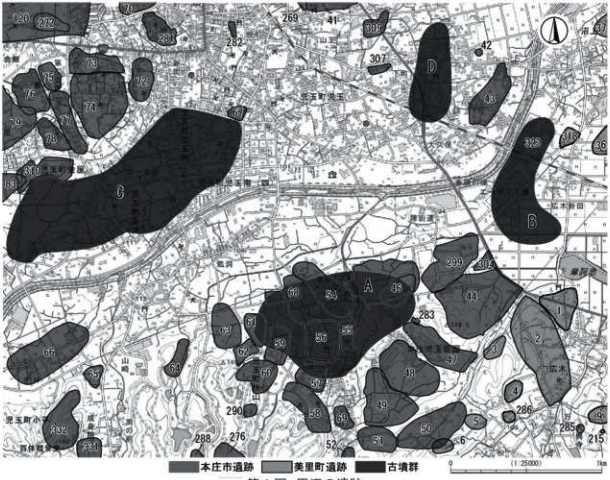
第２節　歴史的環境

遺跡周辺は、小山川の氾濫原を臨む区域として多様な土地利用が行われた場所であり、古墳時代から中世の遺跡が知られている。特に古墳時代後期に集落の最盛期が認められており、秋山大町遺跡、広木大町遺跡、秋山東遺跡、甑薩神社前遺跡、広木上宿遺跡、秋山郷戸遺跡など小山川右岸の遺跡で、集落形成が活発である。

また、遺跡の西側には秋山古墳群が位置している。秋山古墳群は、少なくとも 73 基以上の古墳によって構成されたと考えられており、諏訪山丘陵上に位置する前方後円墳の秋山諏訪山古墳や、二重の周堀がある秋山庚申塚古墳など、43 基が現存するとされる。古墳群は、おおむね小山川に沿って帯状に展開しており、同じように右岸東側に広木大町古墳群、北西対岸に長沖古墳群、北側対岸に下町古墳群がある。これらの古墳群は、石室石材に小山川の河床礫である三波川系の結晶片岩を利用する共通性が指摘されている。

奈良時代になると、集落跡は比較的小規模となる。遺跡が所在する本庄市児玉町秋山地区は、旧武蔵国那珂郡に相当する。律令期の集落は、条里水田が展開する低地内の微高地上に極めて少なく、むしろ低地を臨む平坦な台地上に展開することが知られており、那珂郡でも同じ状況が反映されたものと考えられている。

平安時代に入ると、文献資料によって、承和十（843）年に那珂郡が戸口増益によって小郡から下郡となり、一郷が新設されて郡司一人の増員が図られたことが知られているなど、集落形成は再び活発となるようである。



第 2 図　周辺の遺跡

中世では、遺跡の南東側に小型宝塔５基や、基壇状遺構が出土して寺院が造営されていたと推定される広木上宿遺跡がある。また、遺跡の北東側には、鎌倉永福寺の同范瓦を焼成した水殿瓦窯跡があり、この地に瓦窯の操業に関与し、鎌倉との密接な関係を持った在地領主の存在が考えられている。本遺跡のすぐ北側には鎌倉街道上道が通っており、小山川を挟んだ対岸の児玉区域は武蔵七党「児玉党」の本貫地である。児玉党の経済基盤となった領域は小山川左岸や丘陵部と考えられており、本遺跡周辺の区域はこのような在地領主群と独立した区域と推定され、のちに東寺領荘園の丹波国大山庄の地頭として西遷した中澤氏との歴史的な関係が指摘されている。

第１表　本庄市周辺遺跡一覧表

№	遺跡名	№	遺跡名	№	遺跡名	№	遺跡名
41	山王山遺跡	57	児玉 57 号遺跡	72	児玉 72 号遺跡	281	八幡山遺跡
42	下町古墳群	58	児玉 58 号遺跡	73	金屋北原遺跡	282	町後東遺跡
43	大久保遺跡	59	児玉 59 号遺跡	74	金屋西遺跡	283	秋山諏訪山古墳
44	**秋山諏訪平遺跡**	60	児玉 60 号遺跡	75	児玉 75 号遺跡	288	秋山中山遺跡
46	児玉 46 号遺跡	61	児玉 61 号遺跡	76	金屋池脇遺跡	290	秋山神原遺跡
47	児玉 47 号遺跡	62	児玉 62 号遺跡	77	倉林東遺跡	299	秋山大町遺跡
48	秋山東遺跡	63	六反畑遺跡	78	児玉 78 号遺跡	304	秋山大町東遺跡
49	児玉 49 号遺跡	64	児玉 64 号遺跡	79	倉林後遺跡	307	児玉大天白遺跡
50	秋山郷戸遺跡	65	児玉 65 号遺跡	83	高柳原遺跡	309	児玉清水遺跡
51	児玉 51 号遺跡	66	児玉 66 号遺跡	120	金屋条里	310	倉林南原遺跡
52	児玉 52 号遺跡	67	児玉 67 号遺跡	269	御林下遺跡	331	東小平中郷遺跡
54	秋山塚原遺跡	68	塚原館跡	271	金屋遺跡群 上一ノ堀遺跡	332	東小平中山遺跡
55	児玉 55 号遺跡	69	秋山館跡	272	金屋遺跡群 一町田堀遺		
56	秋山大明神遺跡	70	雉岡城跡	276	般若寺跡		

第２表　美里町周辺遺跡一覧表

№	遺跡名	№	遺跡名	№	遺跡名	№	遺跡名
1	塙耀神社前遺跡	5	上山遺跡	37	北川原遺跡	318	後山王遺跡
2	広木上宿遺跡	6	上山遺跡	215	№２１５	323	後山王Ｂ地点遺跡
3	白屋遺跡	9	吉原遺跡	285	さらし井		
4	御所内遺跡	36	宮上遺跡	286	伝大伴真足女遺跡		

Ａ．秋山古墳群　Ｂ．広木大町古墳群　Ｃ．長沖古墳群　Ｄ．下町古墳群

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

秋山諏訪平遺跡は、これまでに本書を含む８次に及ぶ発掘調査が実施されている。1980 年にＡ地点で町道整備、1991 年にＢ地点の建売分譲住宅建設と、Ｃ地点の一般廃棄物保管場建設に伴う発掘調査が実施され、1996 年～ 1999 年にＤ・Ｅ・Ｆ地点で工場建設に伴う大規模調査が行われて、古墳時代後期を中心に、断続的ながら縄文時代早期から中近世に至る各種の遺構と遺物が検出された。

工場建設に伴う大規模な発掘調査は、隣接する秋山大町遺跡・秋山大町東遺跡でも実施され、これらの遺跡からも特に古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての住居跡が約 340 軒検出され大規模な集落が展開していることが明らかとなった。

この集落群は、秋山古墳群と広木大町古墳群の中間に位置し、これらの墓域と関連する集落の可能性がある。各遺跡の境界は旧河道の埋没による低地帯で画されているものの、本来は相互に有機的な関連を持つひとつの集落を構成していたと考えられよう。そこで本節では、その後の調査も踏まえて、各遺跡ごとに時期の明確な住居跡と、古墳時代後期をはじめとする特筆すべき遺物を中心にまとめておきたい。

１　秋山諏訪平遺跡

Ａ地点　町道整備に伴う発掘調査として実施された。古墳時代後期と平安時代の住居跡が検出されたとされる（未報告）。

Ｂ地点　建売分譲住宅建設に伴い発掘調査が実施された。住居跡 36 軒、土坑が検出されている。時期が明確な住居跡は、古墳時代後期 16 軒、奈良時代２軒、平安時代１軒である。

Ｃ地点　一般廃棄物保管場の建設に伴い発掘調査が実施された。住居跡９軒、土坑 15 基が検出されている。縄文時代早期未葉の尖底土器が逆位で土坑内から検出されている。住居跡は全て古墳時代後期のものである。第５号住居跡では、カマド両袖に土師器甕が２個ずつ補強材として埋置され、臼玉４点が覆土から出土している。

Ｄ・Ｅ・Ｆ地点　工場建設に伴い発掘調査が実施された。住居跡 82 軒、掘立柱建物跡５棟、土坑 204 基、溝 38 条、井戸５基、溜井５基、道路状遺構１条、性格不明遺構１基が検出されている。時期が明確な住居跡は、古墳時代 38 軒、奈良時代５軒、平安時代 16 軒である。

古墳時代の第２～４号住居跡から須恵器大甕、第 152 号住居跡・97 号土坑から臼玉が出土している。平安時代の第４号溜井からは、国分寺創建期の献納瓦と考えられる那珂郡を示す「中」の押印ある平瓦が出土している。

Ｇ地点　工場建設に伴い発掘調査が実施された。住居跡４軒、土坑３基、ピットが検出されている。住居跡は、奈良時代２軒と、平安時代２軒である。

Ｈ地点　本書で報告する変電所建設に伴い実施した発掘調査である。住居跡 27 軒を確認した。時期が明確な住居跡は、古墳時代後期 23 軒、奈良時代２軒、平安時代２軒である。古墳時代後期の第 135 号住居跡から藤岡産の鈴付須恵器が出土した。

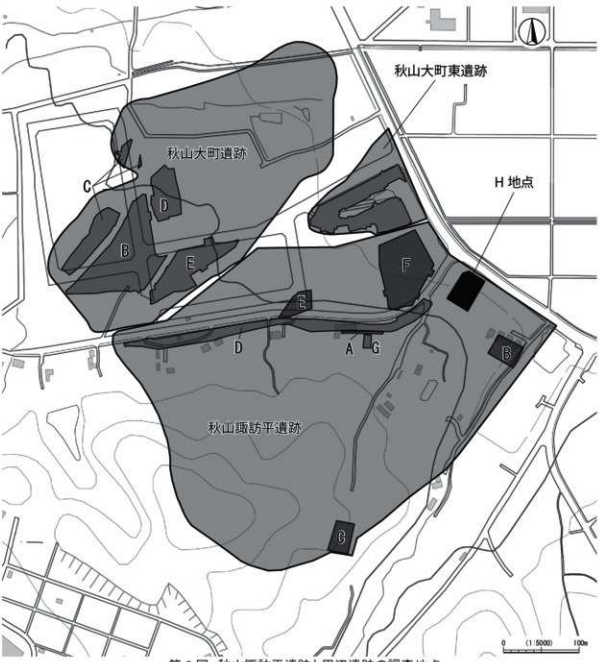
2　秋山大町遺跡

秋山大町遺跡は、1990 年と 1997 ～ 1999 年に発掘調査が実施され、古墳時代後期を中心に、縄文時代から近世に至る遺構と遺物が検出されている。各地点の概要は、以下の通りである。

A地点　農道改良工事に伴う発掘調査として実施された（未報告）。

B・C・D・E地点　工場建設に伴い発掘調査が実施された。縄文時代から近世の住居跡 149 軒、掘立柱建物跡 41 棟、土坑 173 基、井戸 7 基、溜井 1 基、溝 37 条、水田址 1 面、埋甕 3 基が検出されている。時期が明確な住居跡は、古墳時代後期 125 軒、平安時代 17 軒である。

縄文時代中期後葉の埋甕が 3 基検出されている。古墳時代後期の第 72 号住居跡は 10 mを越える大型である。また、第 8 号住居跡から搬入品（尾張産か？）と推定される鈴付須恵器、第 74 号住居跡から土製勾玉、第 101 号住居跡から土玉、第 138 号住居跡のカマド右袖脇の床面から子持勾玉や白玉が出土している。子持勾玉は、平安時代の第 1 号溝の覆土中から、もう 1 点出土している。



第 3 図　秋山諏訪平遺跡と周辺遺跡の調査地点

3　秋山大町東遺跡

秋山大町東遺跡は、工場建設に伴い発掘調査が実施された。古墳時代から平安時代の住居跡 98 軒、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 118 基、溝 23 条、性格不明遺構 1 基、ピット多数を検出している。時期が明確な住居跡は、古墳時代後期 57 軒、奈良時代 2 軒、平安時代 18 軒である。

古墳時代後期の第 62･71 号住居跡では、カマド袖に土師器甕が構築材として用いられている。また、第 27 号住居跡の西壁沿いから須恵器大甕、第 35 号住居跡から鉄鏃、第 70 号住居跡から剣形石製模造品が出土している。奈良時代の第 51 号住居跡では、カマド袖に土師器甕が構築材として用いられている。平安時代の第 44 号住居跡から石製巡方が出土している。

第 3 表　調査地点の概要

遺跡・地点		調査面積㎡	古墳（後期）	奈良	平安	特記遺物	発掘	文献
秋山諏訪平遺跡	A地点	—	住居跡	—	住居跡	—	1980	（未報告）
	B地点	754	住居跡 16	住居跡 2	住居跡 1	臼玉	1991	1
	C地点	1,000	住居跡 9	—	—	—	1991	2
	D地点	4,280	住居跡 38	住居跡 5	住居跡 16	臼玉 須恵器大甕	1996・1997	3
	E地点	830					1998・1999	
	F地点	4,930					1998	
	G地点	160	—	住居跡 2	住居跡 2	—	2004	4
	H地点	1,336	住居跡 23	住居跡 2	住居跡 2	鈴付須恵器	2021	本書
秋山大町遺跡	A地点	—	—	—	—	—	1990	（未報告）
	B地点	7,760	住居跡 125	—	住居跡 17	臼玉 土製勾玉 子持勾玉 鈴付須恵器	1997-1999	5
	C地点	2,090						
	D地点	2,120						
	E地点	3,660						
秋山大町東遺跡		5,216	住居跡 57	住居跡 2	住居跡 18	剣形石製模造品 須恵器大甕	1998	3

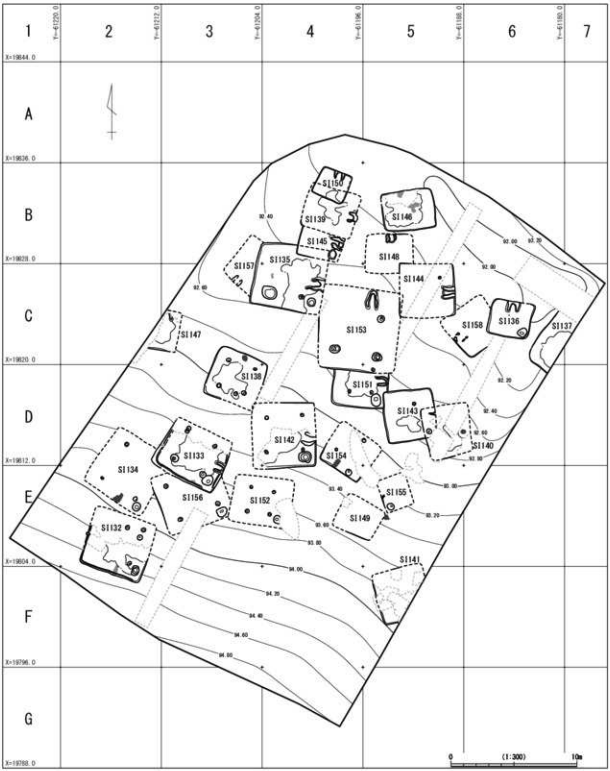
1　石丸敦史編 2010『秋山諏訪平遺跡Ⅱ－B 地点の調査－』（本庄市遺跡調査会報告書第 38 集）　本庄市遺跡調査会

2　鈴木徳雄編 2007『秋山諏訪平遺跡－C 地点の調査－』（本庄市遺跡調査会報告書第 17 集）　本庄市遺跡調査会

3　宮本久子編 2010『秋山大町東遺跡　秋山諏訪平遺跡群－D・E・F 地点の調査－』（本庄市遺跡調査会報告書第 37 集）　本庄市遺跡調査会

4　鈴木徳雄編 2012『秋山諏訪平遺跡Ⅳ－G 地点の調査－』（本庄市遺跡調査会報告書第 44 集）　本庄市遺跡調査会

5　宮本久子編 2010『秋山大町遺跡－B・C・D・E 地点の調査－』（本庄市遺跡調査会報告書第 36 集）　本庄市遺跡調査会



第 4 図　秋山諏訪平遺跡　H 地点全体図

第２節　住居跡

秋山諏訪平遺跡Ｈ地点で検出した住居跡は、古墳時代後期 23 軒、奈良時代２軒、平安時代２軒の計 27 軒である。台地斜面部南東を除いて、調査区全体に分布し重複関係も多い。主軸方位は北か東が多く、一辺３～７ｍの方形である。４本の主柱穴を対角線上に配し、貯蔵穴を住居の南東隅に設置する例が多い。

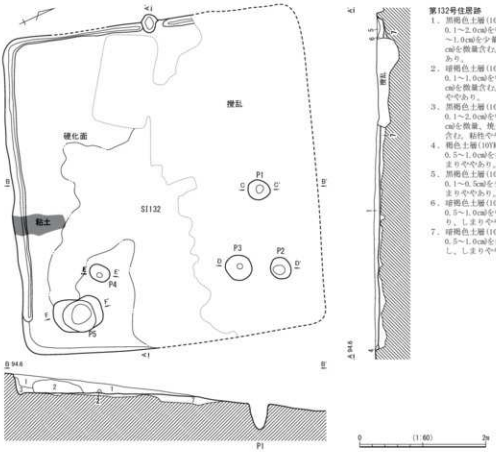
遺物は、土師器坏・高坏・壺・鉢・甑・甕、須恵器坏・蓋・高坏・高台付埦・短頸壺・甕などが出土した。第 135 号住居跡から藤岡産の鈴付須恵器が出土したことが特筆される。

既報告の秋山諏訪平遺跡Ｄ・Ｆ地点の東側に展開した古墳時代後期を中心とする集落と考えられる。集落の変遷については、秋山諏訪平遺跡と周辺遺跡の大規模発掘成果に基づいて編年案が提示されており（宮本 2010:以下、宮本編年と略す）、本書でも時期的に細別できる遺構については、これに従って記載した。

第 132 号住居跡（第５・６・７図）

Ｅ・Ｆ－２グリッドに位置する。遺構の重複関係はない。北側の台地斜面部が削平されているが、平面形態は方形と思われる。規模は、長軸 5.26 ｍ、短軸 4.91 ｍ、深さ 0.28 ｍである。主軸方位はＮ－72°－Ｗである。覆土は６層で黒褐色土を基調とする。南壁中央やや東側の覆土中に白色粘土がまとまって検出した。床面は１層下面に硬化面が認められた。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、西壁に焼土粒を確認し、浅い掘り込み状になっていたことから、本来ここにカマドが設置されていたものと思われる。



第132号住居跡
1．黒褐色土層(10YR2/2)，ローム粒子(φ0.1～2.0cm)を中量，炭化物粒子(φ0.5～1.0cm)を少量，焼土粒子(φ0.5～1.0cm)を微量含む。粘性ややなし，しまりあり。
2．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)を中量，焼土粒子(φ0.5cm)を微量含む。粘性ややなし，しまりややあり。
3．黒褐色土層(10YR3/2)，ローム粒子(φ0.1～2.0cm)を中量，炭化物粒子(φ0.5cm)を微量，焼土粒子(φ1.0cm)を微量含む。粘性ややなし，しまりあり。
4．褐色土層(10YR4/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性あり，しまりややあり。
5．黒褐色土層(10YR3/1)，ローム粒子(φ0.1～0.5cm)を少量含む。粘性あり，しまりややあり。
6．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を中量含む。粘性ややあり，しまりややあり。
7．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし，しまりややなし。

第５図　第 132 号住居跡（1）

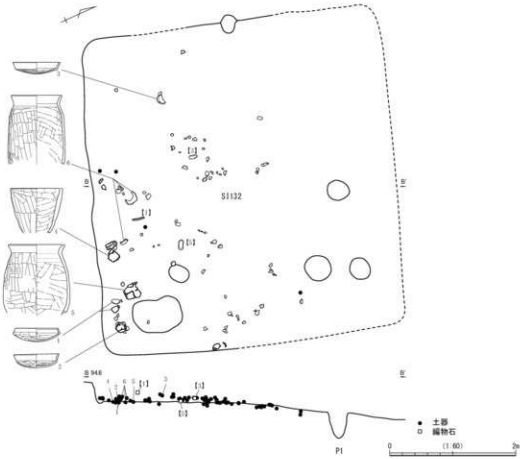
ピットは５基検出した。Ｐ３・Ｐ４が主柱穴と思われるが、掘り込みが浅く、対応する西側の柱穴は未検出である。Ｐ１・Ｐ２は不規則であり、住居跡に伴う柱穴か不明である。Ｐ５は貯蔵穴と思われる。規模は長軸 0.78 m、短軸 0.56 m、深さ 0.50 mである。

壁溝は西壁から南壁で確認した。規模は幅 0.07 ～ 0.18 m、深さ 0.03 mである。

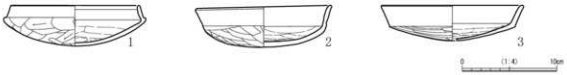
遺物は中央から南東側に分布する。第８図１～３は土師器坏である。いずれも身が浅い。１はいわゆる身模倣坏である。２・３は蓋模倣坏で、口縁部が外反している。第９図４は土師器甕である。５・６は土師器甕である。

時期は古墳時代後期、土師器坏類の形態的特徴から宮本編年Ⅳ期、６世紀後半に位置付けられる。

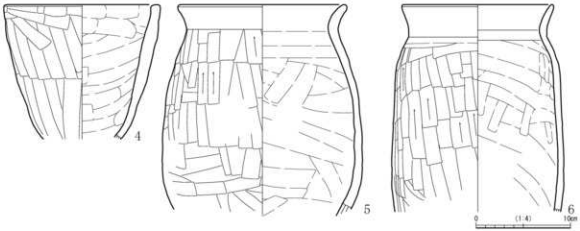
第６図　第 132 号住居跡（2）



第７図　第 132 号住居跡遺物出土状況



第８図　第 132 号住居跡出土遺物（1）



第 9 図　第 132 号住居跡出土遺物（2）

第 4 表　第 132 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 13.1、器高 4.3。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒。E．内外 - 暗赤褐色。F．ほぼ完形。G．丸底。口縁部短く内傾し下端に明瞭な稜を持つ。全体に ススが付着。H．SI132 No.52,53。
2	土師器 坏	A．口縁部径 14.1、器高 4.3。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒。E．内外 - 橙色。F．ほぼ完形。G．丸底。口縁部やや外反し下端に弱い稜を持つ。H．SI132 No.78。
3	土師器 坏	A．口縁部径 (14.6)、器高〈3.7〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒。E．内外 - 橙色。F．口縁部～底部 1/2。G．丸底。口縁部外傾し下端に弱い稜を持つ。H．SI132 No.4。
4	土師器 甕	A．口縁部径 (15.7)、器高〈14.3〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 体部タテケズリ後口縁部ヨコケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、角閃石、礫。E．内外 - 赤褐色。F．口縁部～胴部 2/3。G．底孔部欠損。H．SI132 No.38,c 区。
5	土師器 甕	A．口縁部径 (17.4)、器高〈22.4〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部下位タテケズリ、中位ヨコケズリ後上位タテケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。胴部ナデ後上位ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、礫。E．外 - 褐色。内 - 暗褐色。F．口縁部～胴部上半 1/3。G．長胴甕。口縁部外反する。胴部中位以下に最大径。H．SI132 No.51。
6	土師器 甕	A．口縁部径 (15.8)、器高〈22.0〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後上位ヨコケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテナデ後ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石、礫。E．内外 - にぶい褐色。F．口縁部～胴部上半 1/4。G．長胴甕。口縁部外傾する。胴部ふくらみを持たない。H．SI132 No.31,32,40,c 区。

第 133 号住居跡（第 10・11 図）

D・E－2・3 グリッドに位置する。SI134・156 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI134・156 より古い。北側の台地斜面部がやや削平されているが、平面形態は方形である。規模は、長軸 5.37 m、短軸 3.12 m以上、深さ 0.20 mである。主軸方位は N － 63°－ W である。覆土は 3 層で、暗褐色土を基調とする。床面は 1 層下面に硬化面が認められた。

カマドは東壁に設置されている。規模は長さ 0.92 m、幅 0.87 mである。カマド両袖には土師器甕が口縁部を伏せた状態で据え置かれていた。袖部の補強材として使用されたものと思われる。また、焚口部から約 0.45 m入った中心からやや左に偏った場所には、石製支脚が据えられていた。底面は概ね平坦で床面との段差はない。

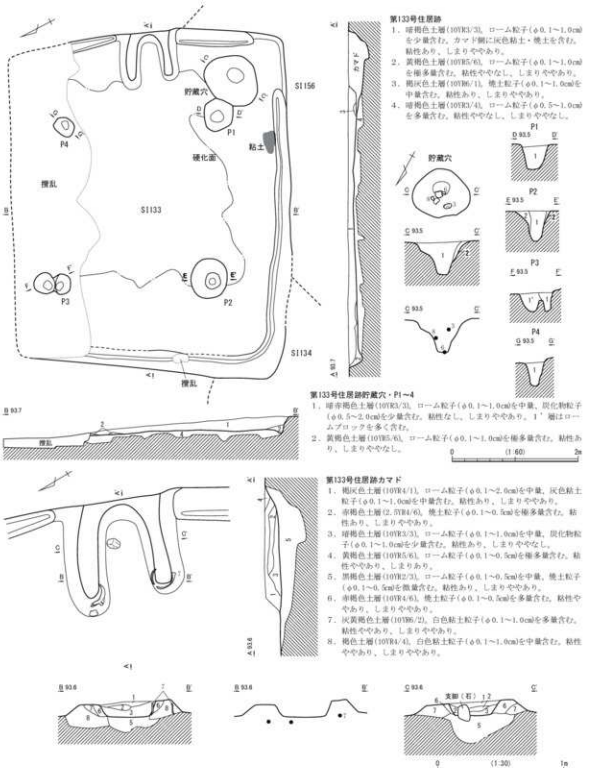
貯蔵穴はカマドに向かって右側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.92 m、短軸 0.78 m、深さ 0.53 mである。

ピットは 4 基検出された。P 1 ～ 4 は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。

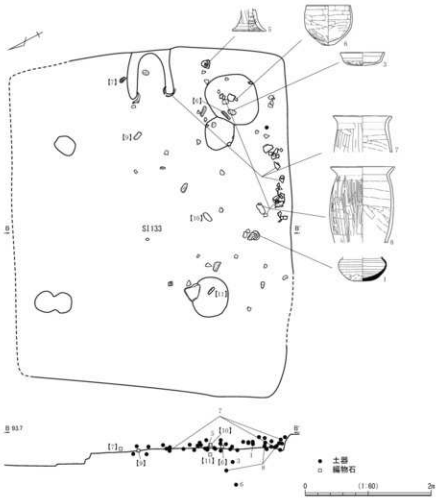
壁溝は東壁と南壁から西壁にかけて確認した。南東隅で途切れるが、本来ほぼ全周していたものと思われる。規模は幅 0.12 ～ 0.47 m、深さ 0.04 mである。

遺物は南東側に多い。特に貯蔵穴周辺や南東壁際にまとまっている。第12図1は藤岡産の須恵器短頸壺である。2は搬入品の須恵器高坏である。3・4は土師器坏である。いずれもいわゆる蓋模倣坏で、口縁部が外反している。3は身が浅く、4はやや深い。5は土師器高坏である。6は土師器鉢である。第13図7・8は土師器甕である。

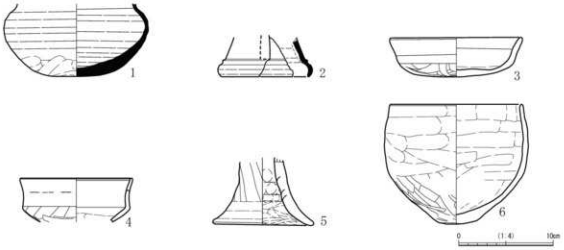
時期は古墳時代後期、土師器坏類の形態的特徴から宮本編年Ⅳ期、6世紀後半に位置付けられる。須恵器の編年的な形態的特徴もこれに整合的である。



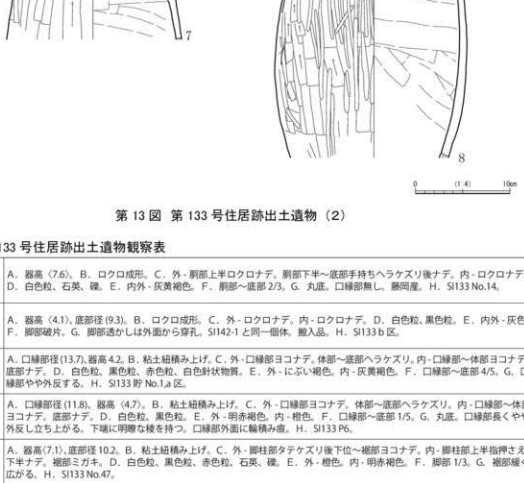
第10図　第133号住居跡



第 11 図　第 133 号住居跡遺物出土状況



第 12 図　第 133 号住居跡出土遺物（1）



第 13 図　第 133 号住居跡出土遺物（2）

第 5 表　第 133 号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 短頸壺	A．器高〈7.6〉．B．ロクロ成形。C．外 - 胴部上半ロクロナデ。胴部下半～底部手持ちヘラケズリ後ナデ。内 - ロクロナデ。D．白色粒、石英、礫．E．内外 - 灰黄褐色．F．胴部～底部 2/3．G．丸底．口縁部無し．藤岡産．H．SI133 No.14.
2	須恵器 高坏	A．器高〈4.1〉、底部径 (9.3)。B．ロクロ成形。C．外 - ロクロナデ。内 - ロクロナデ。D．白色粒、黒色粒．E．内外 - 灰色。F．脚部破片。G．脚部透かしは外面から穿孔。SI142-1 と同一個体。搬入品。H．SI133 b 区。
3	土師器 坏	A．口縁部径 (13.7)、器高 4.2。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、白色針状物質。E．外 - にぶい褐色。内 - 灰黄褐色。F．口縁部～底部 4/5。G．口縁部やや外反する。H．SI133 貯 No.1,a 区。
4	土師器 坏	A．口縁部径 (11.8)、器高〈4.7〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒。E．外 - 明赤褐色。内 - 橙色。F．口縁部～底部 1/5。G．丸底。口縁部長くやや外反し立ち上がる。下端に明瞭な稜を持つ。口縁部外面に輪積み痕。H．SI133 P6。
5	土師器 高坏	A．器高 (7.1)、底部径 10.2。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 脚柱部タテケズリ後下位～裾部ヨコナデ。内 - 脚柱部上半指押さえ、下半ナデ。裾部ミガキ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．脚部 1/3。G．裾部緩く広がる。H．SI133 No.47。
6	土師器 鉢	A．口縁部径 (13.9)、器高 12.7、底部径 (4.0)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部タテケズリ後上半ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。D．白色粒、石英。E．外 - にぶい赤褐色。内 - 褐色。F．口縁部～底部 1/4。H．SI133 No.36, 貯 No.3。
7	土師器 甕	A．口縁部径 18.2、器高〈11.1〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫．E．外 - にぶい赤褐色。内 - 褐色。F．口縁部～胴部上半 1/4．G．口縁部外反する。H．SI133 No.22,23,a 区，ｶｸﾄﾞ No.3, 一括。
8	土師器 甕	A．口縁部径 20.0、器高〈24.2〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後タテミガキ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、礫．E．内外 - 橙色。F．口縁部～胴部 2/3。G．長胴甕。口縁部短く開く。H．SI133 No.19,21, 貯 No.2, 貯。

第 134 号住居跡（第 14 図）

D・E－2・3 グリッドに位置する。SI133・156 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI133 より新しく、SI156 より古い。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。平面形態は方形である。規模は、長軸 5.42 m以上、短軸 5.23 m以上である。主軸方位は N － 32°－ E である。覆土は 1 層で暗褐色土を基調とする。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、南壁で焼土のまとまりを確認したことから、本来ここにカマドが設置されていたものと思われる。

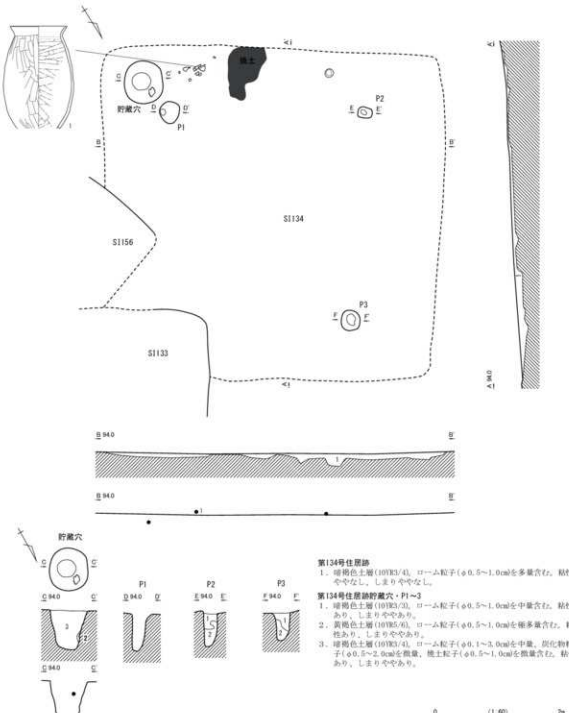
貯蔵穴は焼土に向かって左側に位置する。平面形態は円形で、規模は長軸 0.68 m、短軸 0.61 m、

深さ 0.63 mである。

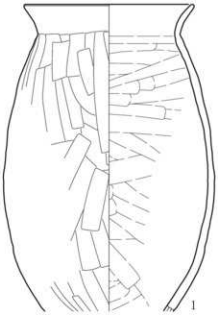
ピットは３基検出した。Ｐ１～３は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。本来Ｐ２の対角線上にもう１本の主柱穴があったと思われるが、未検出である。壁溝は検出されなかった。

遺物は床面上や貯蔵穴から僅かに出土している。第 15 図１は土師器甕である。

時期は古墳時代後期、遺物が少なく細別時期の決定は難しいが、SI133 とほぼ同時期か新しい宮本編年Ⅳ～Ⅴ期、６世紀後半から７世紀前半と考えておきたい。



第 14 図　第 134 号住居跡



第 15 図　第 134 号住居跡出土遺物

第 6 表　第 134 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A．口縁部径 (17.7)、器高（32.5）。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、礫、土器片。E．外 - にぶい橙色。内 - 橙色。F．口縁部～胴部下端 1/5。G．長胴甕。口縁部短く外反する。胴部下位に焼土付着。H．SI134 No.1。

第 135 号住居跡（第 16・17 図）

B・C－3・4 グリッドに位置する。SI145・153・157 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI145・153・157 より古い。平面形態は方形である。規模は、長軸 5.64 m以上、短軸 5.27 m、深さ 0.17 mである。主軸方位はN－83°－Wである。覆土は２層で、暗褐色土を基調とする。床面は２層下面に硬化面が認められた。

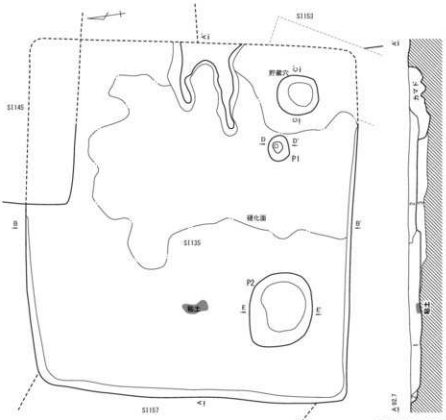
カマドは東壁に設置されている。規模は長さ 1.47 m、幅 1.14 mである。焚口部から約 0.60 m入った底面の中心から左に偏った場所で、土師器小型甕が口縁部を伏せた状態で出土した。

貯蔵穴はカマドに向かって右側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.66 m、短軸 0.63 m、深さ 0.34 mである。

ピットは２基検出された。P１は主柱穴と考えられるが浅く、ほかに対応する柱穴も検出することができなかった。P２はいわゆる床下土坑を思われる。壁溝は検出されなかった。

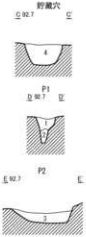
遺物は中央から東側に多い。特にカマドと貯蔵穴周辺にまとまっている。第 18 図１は藤岡産の須恵器で、脚部を閉塞し陶丸を入れたと思われる鈴付高坏である。２・３は土師器坏である。いわゆる蓋模倣坏で身が深い。２は口縁部が直線状に立ち上がり、３はやや外反する。４は土師器鉢である。丸底で、口縁部は外反する。５・第 19 図６は土師器甑である。５は胴部にやや張りがあり、６は直線状である。７・８は土師器の小型甕、９は土師器甕、10 は土師器壺である。

時期は古墳時代後期、土師器坏類の形態的特徴から宮本編年Ⅱ期、５世紀末から６世紀初頭に位置付けられる。須恵器の編年的な形態的特徴もこれと矛盾しない。



第135号住居跡

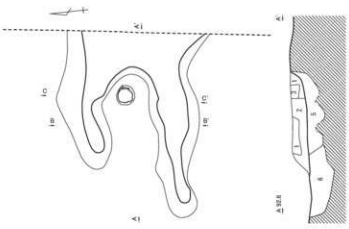
1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.5～5.0cm)を少量，焼化物粒子(φ0.5～1.0cm)を微量。焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性ややあり，しまりややあり。
2．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～10.0cm)を中量含む。粘性ややあり，しまりややあり。
3．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし，しまりややなし。



第135号住居跡貯蔵穴・P1・2

1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.5～5.0cm)を中量含む。粘性あり，しまりややあり。
2．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.1～0.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。
3．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.5～2.0cm)を少量含む。粘性あり，しまりややなし。
4．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～5.0cm)を中量含む。ロームブロックを含む。粘性あり，しまりややあり。

0　(1:60)　2m

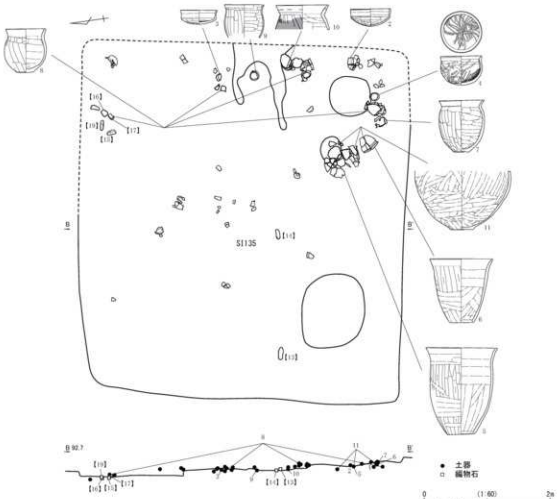


第135号住居跡カマド

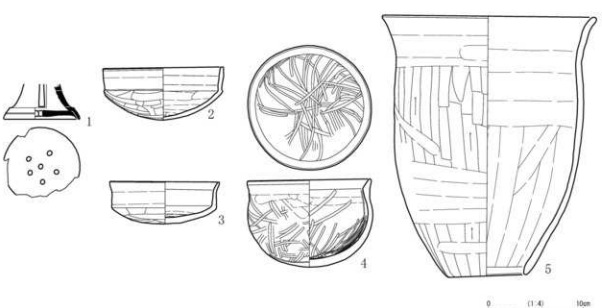
1．赤褐色土層(2.5YR4/6)，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を極多量含む。粘性あり，しまりややあり。
2．暗褐色土層(10YR3/3)，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を少量含む。粘性あり，しまりややあり。
3．褐灰色土層(10YR6/1)，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量，焼土粒子(φ2.0～0.5cm)を少量含む。粘性あり，しまりややあり。
4．灰褐色土層(10YR6/2)，白色粘土粒子(φ1.0～2.0cm)を微量，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，ローム粒子(φ1.0～2.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりあり。
5．暗褐色土層(10YR3/3)，白色粘土粒子(φ1.0～2.0cm)を微量，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を少量含む。粘性あり，しまりややあり。
6．黒色土層(10YR2/1)，白色粘土粒子(φ1.0～2.0cm)を中量，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。

0　(1:20)　1m

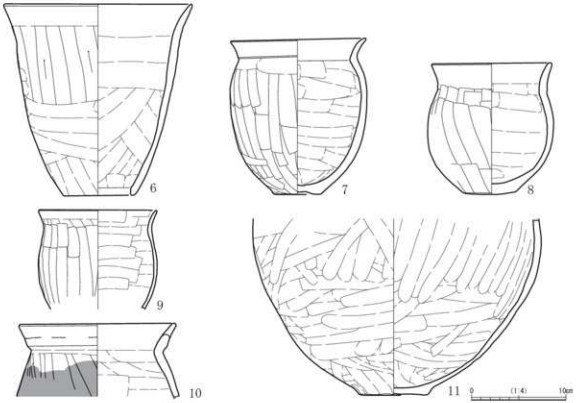
第 16 図　第 135 号住居跡



第 17 図　第 135 号住居跡遺物出土状況



第 18 図　第 135 号住居跡出土遺物（1）



第 19 図　第 135 号住居跡出土遺物（2）

第 7 表　第 135 号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 鈴付高坏	A．器高〈3.7〉、底部径 (8.2)。B．ロクロ成形。C．内外 - ロクロナデ。脚部に版状のものを蓋をするように貼り付けたのち、6 個の孔を外面より穿つ。D．白色粒、黒色粒、石英、角閃石、白色針状物質。E．外 - 灰色。内 - 黄灰色。F．脚底部 1/10。G．脚部透かしは 4 単位。H．SI135 b 区。
2	土師器 坏	A．口縁部径 12.5、器高 5.5。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．完形。G．丸底。口縁部直立して下端に明瞭な稜を持つ。藤岡産。H．SI135 No.37。
3	土師器 坏	A．口縁部径 11.5、器高 4.5。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - 明赤褐色。内 - 赤褐色。F．ほぼ完形。G．丸底。口縁部外反し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI135 No.28。
4	土師器 鉢	A．口縁部径 12.9、器高 9.2。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部ナデ後ミガキ。底部ケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ後放射状ミガキ。D．白色粒、黒色粒。E．外 - 赤褐色。内 - にぶい赤褐色。F．ほぼ完形。G．丸底。口縁部短く外反する。H．SI135 No.42。
5	土師器 甑	A．口縁部径 22.2、器高 27.5、底部径 8.2。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後中位ヨコナデ。内 - 口縁部～胴部上半ヨコナデ。胴部中位以下タテナデ。D．白色粒、黒色粒、礫、土器片。E．内外 - 橙色。F．ほぼ完形。G．口縁部緩く開く。H．SI135 No.13。
6	土師器 甑	A．口縁部径 19.8、器高 20.3、底部径 7.4。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後中位ヨコナデ、下端タテナデ。内 - 口縁部～胴部上半ヨコナデ。胴部下半ナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石、礫、土器片。E．内外 - 橙色。F．ほぼ完形。G．口縁部ゆるく開く。底部外面より穿孔。H．SI135 No.12。
7	土師器 小型甕	A．口縁部径 14.2、器高 16.4、底部径 5.0。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後上端ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒。E．外 - 赤褐色。内 - 暗赤褐色。F．口縁部～底部 2/3。G．上げ底。口縁部短く外反する。H．SI135 No.44。
8	土師器 小型甕	A．口縁部径 12.4、器高 13.9、底部径 5.4。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒。E．外 - にぶい赤褐色。内 - にぶい褐色。F．口縁部～底部 3/4。G．口縁部外傾する。H．SI135 No.21,29,31,43。
9	土師器 小型甕	A．口縁部径 12.4、器高〈10.5〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．外 - にぶい褐色。内 - 灰褐色。F．口縁部～胴部 2/3。G．口縁部直線的に開く。H．SI135 ｴﾘﾄ No.1。
10	土師器 甕	A．口縁部径 16.3、器高 (7.7)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．口縁部～胴部上端 1/5。G．口縁部外反して端に段を持つ、外面に輪積み痕。胴部外面にススが付着。H．SI135 No.36。
11	土師器 壷	A．器高〈18.7〉、底部径 7.2。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 胴部下端タテナデ、下位ヨコナデ後中位タテナデ。底部ヘラケズリ。内 - 底部ナデ。胴部下位ヨコナデ後中位タテナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒。E．内外 - 橙色。F．胴部下半～底部 1/2。H．SI135 No.12,13,14。

第 136 号住居跡（第 20・21 図）

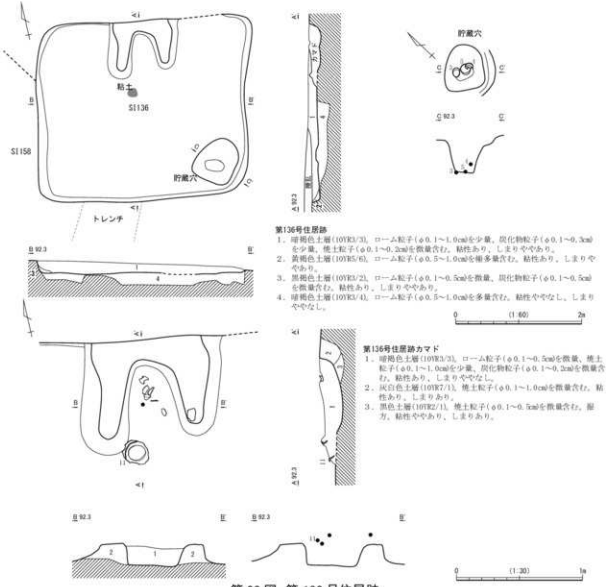
C－6 グリッドに位置する。SI158 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI158 より古い。平面形態は方形である。規模は、長軸 3.42 m、短軸 2.86 m、深さ 0.20 mである。主軸方位は N－32°－E である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。覆土は３層で、暗褐色土を基調とする。

カマドは北壁に設置されている。規模は長さ 1.17 m、幅 0.88 mである。底面は概ね平坦で床面との段差はない。

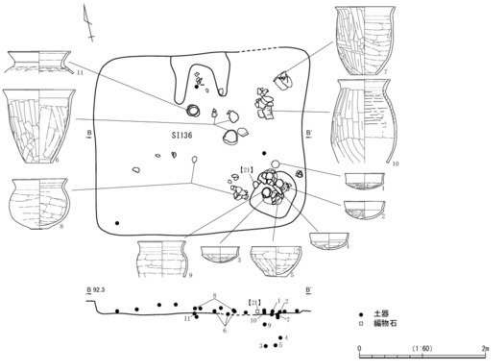
貯蔵穴は南東隅に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.74 m、短軸 0.64 m、深さ 0.51 mである。ピットや壁溝は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴周辺とカマド及びその東側に多い。第 22 図１～４は土師器坏である。いわゆる蓋模倣坏で身は深い。１～３は口縁部が外反し、４は直線的である。５・８・第 23 図９は土師器鉢で、大振りである。６・７は土師器甑である。６は胴部の張りが弱く、７は強い。10 は土師器甕である。長胴化しているが、まだ球胴の範囲であろう。11 は土師器壺である。口縁部の外面に稜が認められる。

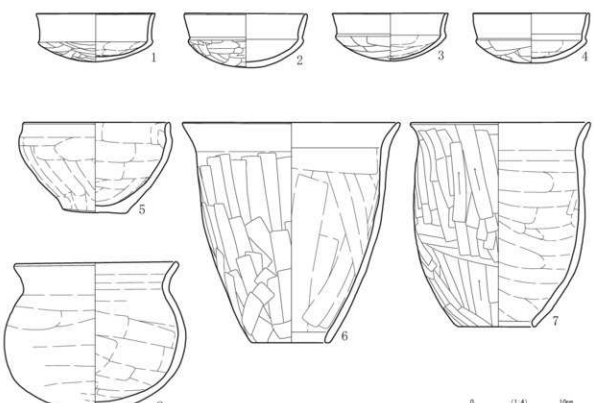
時期は古墳時代後期、土師器の形態的特徴から宮本編年Ⅲ期、６世紀前半に位置付けられる。



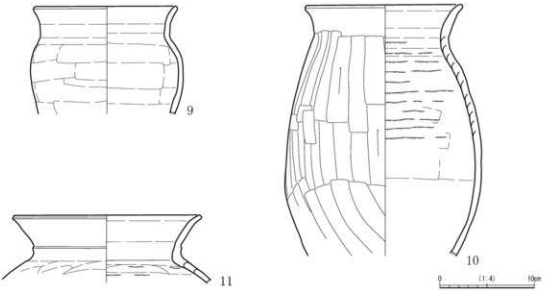
第 20 図　第 136 号住居跡



第 21 図　第 136 号住居跡遺物出土状況



第 22 図　第 136 号住居跡出土遺物（1）



第 23 図　第 136 号住居跡出土遺物（2）

第 8 表　第 136 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 12.0、器高 4.9、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．完形。G．丸底。口縁部長くやや外反し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI136 No.18。
2	土師器 坏	A．口縁部径 12.8、器高 5.7、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．ほぼ完形。G．丸底。口縁部外傾し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI136 No.20。
3	土師器 坏	A．口縁部径 12.2、器高 5.1、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、赤色粒、礫。E．内外 - 橙色。F．完形。G．丸底。口縁部外反し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI136 貯 No.3。
4	土師器 坏	A．口縁部径 12.2、器高 5.3、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、赤色粒、礫。E．内外 - 橙色。F．口縁部～底部 4/5。G．丸底。口縁部直立し下端に明瞭な稜を持つ。内外面ススが付着。H．SI136 貯 No.1。
5	土師器 鉢	A．口縁部径 15.3、器高 9.6、底部径 6.8、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部タテケズリタテナデ。底部ヘラケズリ。内 - 体部～底部タテナデ後口縁部～体部上半ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫、土器片。E．内外 - にぶい褐色。F．完形。G．口縁部わずかに内彎し立ち上がる。H．SI136 貯 No.2。
6	土師器 甑	A．口縁部径 22.5、器高 23.3、底部径 8.0、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．外 - 明赤褐色。内 - 赤褐色。F．口縁部～底部 2/3。G．口縁部やや外反する。胴部外面ススが付着。H．SI136 No.9,11,13, ｶﾏﾄﾞ。
7	土師器 甑	A．口縁部径 18.9、器高 21.6、底部径 8.1、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部～胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、礫、土器片。E．外 - 明黄褐色。内 - にぶい黄褐色。F．ほぼ完形。G．口縁部やや外反する。底部外面より穿孔。H．SI136 No.24。
8	土師器 鉢	A．口縁部径 17.0、器高 15.9、底部径 5.7、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英。E．外 - 明赤褐色。内 - 赤褐色。F．口縁部～底部 2/3。G．口縁部外反する。胴部大きく張り出す。H．SI136 No.5,14。
9	土師器 鉢	A．口縁部径 14.8、器高〈11.4〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部～胴部ヨコナデ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石。E．内外 - にぶい橙色。F．口縁部～胴部上半 1/3。G．口縁部外反する。外面ススが付着。H．SI136 No.16。
10	土師器 甕	A．口縁部径 16.2、器高〈26.6〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、雲母、礫。E．外 - 暗褐色。内 - 赤褐色。F．口縁部～胴部 2/3。G．長胴甕。口縁部外反する。胴部内面に輪積み痕が残る。H．SI136 No.23。
11	土師器 壷	A．口縁部径 19.5、器高〈7.2〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部～胴部上端ヨコナデ。内 - 口縁部～胴部上端ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．口縁部～胴部上端 1/10。G．口縁部外反し下端に段を持つ。胴部内面に輪積み痕が残る。H．SI136 No.6, ｶﾏﾄﾞ。

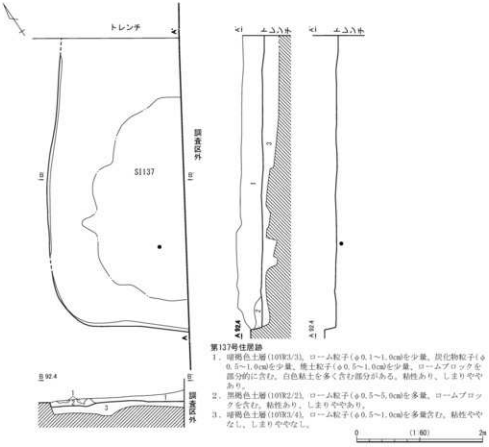
第 137 号住居跡（第 24 図）

C・D－6・7 グリッドに位置する。調査区の北東隅にあり、調査区外に延びている。重複する遺構はない。平面形態は方形になると思われる。規模は、長軸 4.68 m以上、短軸 2.21 m以上、深さ 0.25 mである。主軸方位は N － 33°－ E である。覆土は 2 層で、暗褐色土を基調とする。床面は 1 層下面に硬化面が認められた。

カマドは検出されなかったが、調査区外の北壁か東壁に設置されたものと考えられる。ここでは北壁を想定した。貯蔵穴やピット、壁溝は検出されなかった。

遺物は図化できるものが出土しなかった。

時期を特定できるような遺物は出土しなかったが、奈良・平安時代以降の遺物が出土していないことから、古墳時代後期と推定しておきたい。



第 24 図　第 137 号住居跡

第 138 号住居跡（第 25 図）

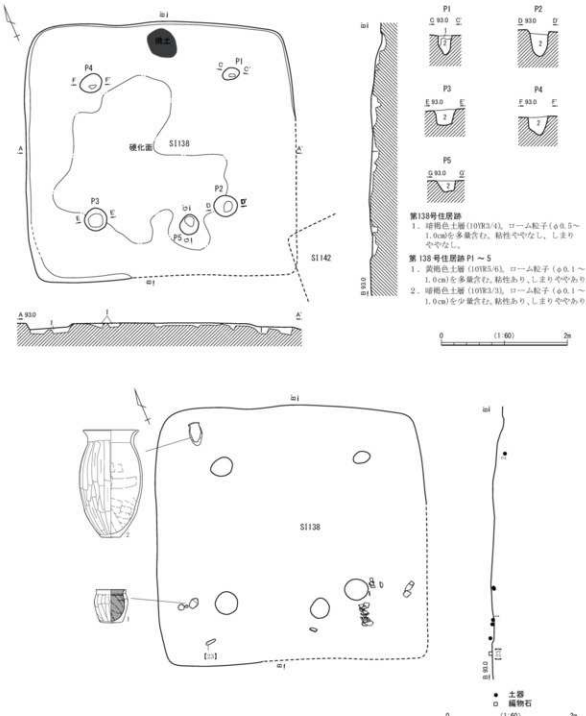
C・D－3・4 グリッドに位置する。SI142 と重複する。遺構の切り合い関係は明確でないが、遺構検出面の深度から SI142 より新しいと思われる。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。平面形態は方形である。規模は、長軸 4.30 m、短軸 4.11 mである。主軸方位は N － 22°－ E である。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、北壁で焼土のまとまりを確認したことから、本来ここにカマドが設置されていたものと思われる。貯蔵穴は確認されなかった。

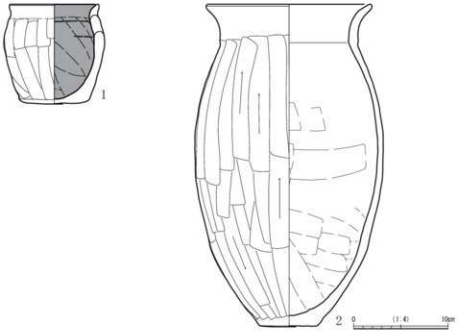
ピットは５基検出された。Ｐ１～４は概ね規則的に配置され、主柱穴と考えられるが、浅い。Ｐ５も含めて柱穴を構成するか不明である。壁溝は検出されなかった。

遺物は、残存していた床面直上の覆土から僅かに出土している。第26図１は土師器の小型甕である。２は土師器甕である。

時期は古墳時代後期、遺物が少なく細別時期の決定は難しいが、SI142 とほぼ同時期か新しい宮本編年Ⅳ～Ⅴ期、６世紀後半から７世紀前半と考えておきたい。



第 25 図　第 138 号住居跡・遺物出土状況



第 26 図　第 138 号住居跡出土遺物

第 9 表　第 138 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 小型甕	A．口縁部径 (9.3)、器高 10.6、底部径 7.4。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。胴部～底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - 赤褐色。内 - 黒褐色。F．口縁部～底部 2/5。G．口縁部短く外傾する。内面輪積み痕が残り全体にススが付着。H．SI138 No.2,N。
2	土師器 甕	A．口縁部径 (17.2)、器高 34.1、底部径 6.0。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部上半ヨコナデ。胴部下半以下ナデ。D．白色粒、黒色粒、礫、土器片。E．外 - にぶい褐色。内 - にぶい橙色。F．口縁部～底部 3/5。G．長胴甕。口縁部外反する。H．SI138 No.1。

第 139 号住居跡（第 27・29 図）

B－4 グリッドに位置する。SI145・150 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI145・150 より新しい。平面形態は方形である。規模は、長軸 4.35 m以上、短軸 3.71 m以上、深さ 0.09 mである。主軸方位は N－83°－W である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。覆土は 1 層で、暗褐色土を基調とする。

カマドは東壁に設置されている。規模は長さ 1.03 m、幅 0.79 mである。遺存状態は良くない。貯蔵穴やピット、壁溝は検出されなかった。

遺物は床面上から僅かに出土している。第 31 図 1 は南比企産の須恵器坏である。2 は土師器甕である。胴部最大径より口径が大きく、弓状口縁部形態のいわゆる武蔵型甕である。

時期は奈良時代、出土遺物の形態的特徴から宮本編年Ⅵ期、8 世紀前半に位置付けられる。

第 145 号住居跡（第 27・28・29 図）

B－4 グリッドに位置する。SI135・139 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI135 より新しく、SI139 より古い。平面形態は方形である。規模は、長軸 3.51 m以上、短軸 2.30 m以上、深さ 0.14 mである。主軸方位は N－78°－W である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。覆土は 2 層で、暗褐色土を基調とする。

カマドは東壁に設置されている。規模は長さ 1.25 m、幅 1.08 mである。焚口部から約 0.65 m入った中心からやや左に偏った場所から、土師器坏が出土した。底面は概ね平坦で床面との段差はない。

貯蔵穴はカマドに向かって右側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.76 m、短軸 0.61 m、深さ 0.25 mである。ピットや壁溝は検出されなかった。

遺物は SI135 と接する西壁周辺でいわゆる編物石がまとまって出土した。第 32 図 1 は土師器坏である。蓋模倣坏で、身は浅く、口縁部は外反している。

時期は古墳時代後期、出土遺物は少ないが、土師器坏の形態的特徴と遺構の切り合い関係から宮本編年Ⅳ期、6 世紀後半に位置付けておきたい。

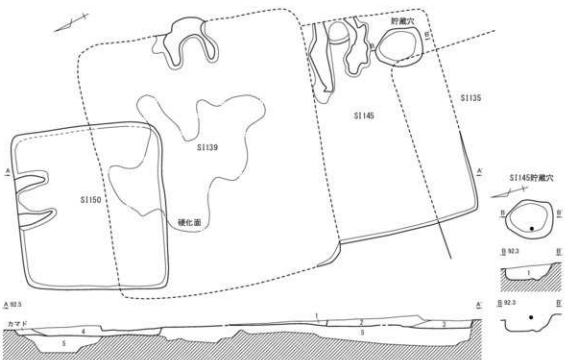
第 150 号住居跡（第 27・28 図）

B－4 グリッドに位置する。SI139 と重複する。遺構の切り合い関係から SI139 より古い。平面形態は方形である。規模は、長軸 2.66 m、短軸 2.36 m、深さ 0.16 mである。主軸方位は N－22°－E である。覆土は 1 層で、暗褐色土を基調とする。

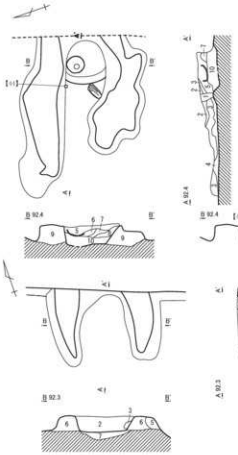
カマドは北壁に設置されている。規模は長さ 0.92 m、幅 0.61 mである。底面は概ね平坦で床面との段差はない。貯蔵穴やピット、壁溝は検出されなかった。

遺物は床面で僅かに出土したが、図化できるものはなかった。

時期の特定は難しいが、奈良時代の SI139 に切られていること、同じように小規模でほぼ軸も揃う SI136 が古墳時代後期の宮本編年Ⅲ期に位置付けられていることから、6 世紀前半と推定しておきたい。



第 27 図　第 139・145・150 号住居跡



第145号住居跡カマド

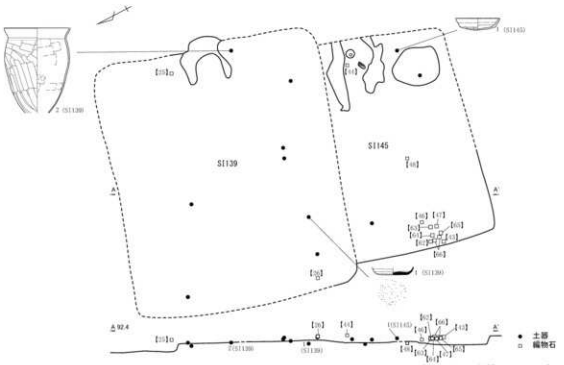
1．褐色土層(10YR4/6)，粘性なし，しまりややあり。
2．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性なし，しまりあり。
3．灰黄褐色土層(10YR6/2)，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，炭化物粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性なし，しまりややあり。
4．暗褐色土層(10YR3/4)，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を中量，炭化物粒子(φ0.1～2.0cm)を少量含む。粘性あり，しまりややあり。
5．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を中量，炭化物粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。
6．黄褐色土層(10YR5/6)，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)を極多量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を少量，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を少量含む。粘性あり，しまりややあり。
7．灰白色土層(10YR7/1)，粘性あり，しまりややあり。
8．黄褐色土層(10YR5/6)，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を極多量，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を少量含む。粘性あり，しまりややあり。
9．灰白色土層(10YR8/1)，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性なし，しまり非常に強い。
10．暗褐色土層(10YR3/3)，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を中量，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。

第150号住居跡カマド

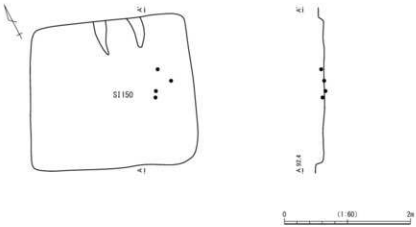
1．黄褐色土層(10YR5/6)，白色粘土粒子(φ0.5～1.0cm)を極多量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性ややなし，しまりあり。
2．暗褐色土層(10YR3/3)，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を中量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を中量含む。白色粘土がブロック状に入る。粘性ややなし，しまりあり。
3．灰白色土層(10YR7/1)，粘性あり，しまりあり。
4．黒色土層(10YR2/1)，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を中量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を少量，炭化物粒子(φ0.1～2.0cm)を少量含む。粘性ややあり，しまりあり。
5．にぶい黄褐色土層(10YR5/3)，褐色粘土粒子(φ0.5～1.0cm)を中量，焼土粒子(φ0.5～1.0cm)を微量含む。粘性なし，しまりあり。
6．灰黄褐色土層(10YR6/2)，焼土粒子(φ0.5～1.0cm)を微量含む。
7．黒色土層(10YR2/1)，炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。

0　(1:20)　1m

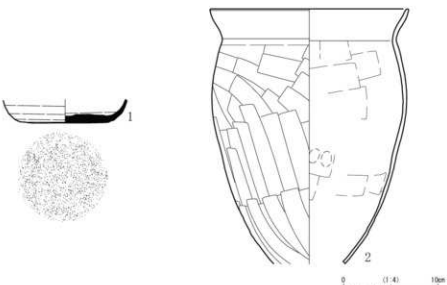
第 28 図　第 145・150 号住居跡



第 29 図　第 139・145 号住居跡遺物出土状況



第 30 図　第 150 号住居跡遺物出土状況



第 31 図　第 139 号住居跡出土遺物

第 32 図　第 145 号住居跡出土遺物

第 10 表　第 139 号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 坏	A．器高〈2.4〉、底部径 9.4。B．ロクロ成形。C．外 - 体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切離し後周辺部回転ヘラケズリ。内 - ロクロナデ。D．白色粒、石英、白色針状物質、雲。E．外 - 橙色。内 - 灰黄褐色。F．体部～底部 1/2。G．南比企産。H．SI139 No.1。
2	土師器 甕	A．口縁部径 (20.7)、器高 (27.0)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部上位ヨコケズリ後中位以下タテケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英。E．外 - 明褐色。内 - 褐色。F．口縁部～胴部 1/3。G．口縁部やや内彎し立ち上がる。胴部中位がややすぼまり内面に指頭痕が残る。底部欠損。H．SI139 No.5,d 区，ｶｸﾄﾞ。

第 11 表　第 145 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 13.7、器高 3.8。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒。E．内外 - 橙色。F．完形。G．緩い丸底。口縁部外傾し下端に弱い稜を持つ，見込みから口縁部外面にかけてススが付着。H．SI145 No.1。

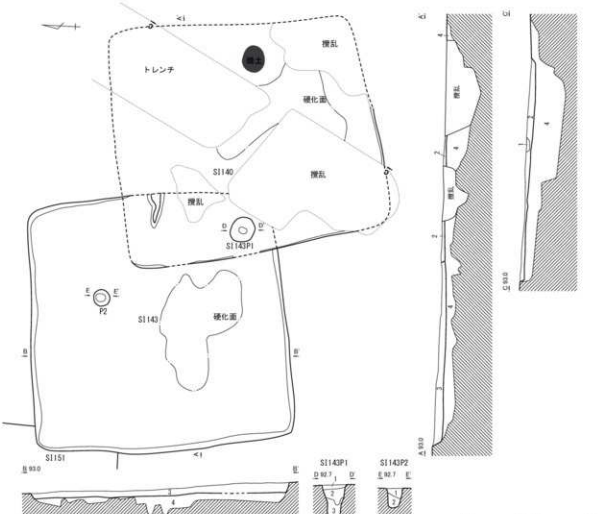
第 140 号住居跡（第 33 図）

D－5・6グリッドに位置する。SI143 と重複する。遺構の切り合い関係から SI143 より新しい。平面形態はほぼ方形である。規模は、長軸 4.22 m以上、短軸 3.62 m以上、深さ 0.05 mである。主軸方位はN－79°－Eである。遺構確認面がほぼ床面であり、試掘トレンチによる影響も大きく、遺存状態は良くない。覆土は２層で、暗褐色土を基調とする。床面は２層下面に硬化面が認められた。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、東壁近くに焼土のまとまりを確認したことから、本来こちら側にカマドが設置されていたものと思われる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

遺物は少ない。第35図１・２は土師器坏である。１は口縁部が失われているが、いずれも蓋模倣坏で、口縁部が外反する。１はやや身が深い。２は身が浅く、内面に黒色処理が施されている。

時期は古墳時代後期、土師器坏の形態的特徴から宮本編年Ⅳ期、６世紀後半に位置付けられる。



第140・143号住居跡
1．暗灰色土層(10YR4/1)、白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を中量、炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)を少量、焼土粒子(φ0.1～0.2cm)を微量含む。粘性なし、しまりややあり。
2．暗褐色土層(10YR3/3)、ローム粒子(φ0.1～0.5cm)を少量、白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量、炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)を微量、焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性あり、しまりややあり。
3．暗褐色土層(10YR3/4)、ローム粒子(φ0.5～3.0cm)を中量、炭化物粒子(φ0.5～1.0cm)を微量。ロームブロックを含む。粘性あり、しまりややあり。
4．暗褐色土層(10YR3/4)、ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし、しまりややなし。

第143号住居跡P1・2
1．暗褐色土層(10YR3/4)、ローム粒子（φ1.0～0.5cm）を微量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
2．暗褐色土層(10YR3/3)、ローム粒子（φ0.5～2.0cm）を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
3．黄褐色土層(10YR5/6)、ローム粒子（φ0.5～1.0cm）を極多量含む。粘性あり、しまりややあり。

第 33 図　第 140・143 号住居跡

第 143 号住居跡（第 33・34 図）

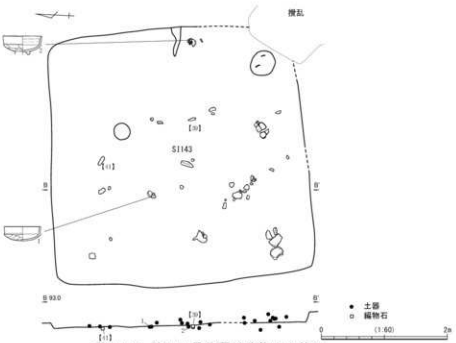
D－5 グリッドに位置する。SI140･151 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI151 より新しく、SI140 より古い。平面形態は方形である。規模は、長軸 4.09 m、短軸 4.05 m、深さ 0.16 mである。主軸方位は N － 79°－ E である。覆土は 1 層で、暗褐色土を基調とする。床面は 3 層下面に硬化面が認められた。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、東壁に袖状の白色粘土のまとまりを確認したことから、本来ここにカマドが設置されていたものと思われる。

ピットは 2 基検出された。P 1 の平面形態は円形で、規模は長軸 0.41 m、短軸 0.37 m、深さ 0.59 mである。しっかりと掘り込まれ、位置関係から貯蔵穴とするには規模が小さい。また、主柱穴とするには対応関係が明確でない。P 2 は浅く、住居跡に伴う柱穴か不明である。壁溝は検出されなかった。

遺物は床面から散漫に出土した。第 36 図 1 は土師器坏である。いわゆる蓋模倣坏で、身が深く、口縁部は直線状に立ち上がっている。2 は土師器高坏である。蓋模倣坏に脚部が付くタイプである。

時期は古墳時代後期、土師器の形態的特徴から宮本編年Ⅱ期、5 世紀末から 6 世紀初頭に位置付けられる。同時期の SI151 を切って、遺物も少ないことから、時期的に下る可能性もあるが、遺構の主軸方向も類似しており、編年的には同時期のやや後出する遺構と判断した。



第 34 図　第 143 号住居跡遺物出土状況

第 35 図　第 140 号住居跡出土遺物

第 36 図　第 143 号住居跡出土遺物

第 12 表　第 140 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．器高〈5.0〉．B．粘土紐積み上げ．C．外 - 口縁部残存微小のため調整不明．体部～底部ヘラケズリ．内 - 器面摩滅のため調整不明．D．白色粒．赤色粒．礫．E．外 - 赤褐色．内 - 暗赤褐色．F．口縁部～底部 1/3．G．丸底．口縁部下端に弱い稜を持つ．内外面ススが付着．H．SI140 w 区．
2	土師器 坏	A．口縁部径 12.6．器高 4.5．B．粘土紐積み上げ．C．外 - 口縁部ヨコナデ．体部～底部ヘラケズリ．内 - 口縁部～体部ヨコナデ．底部ナデ．D．白色粒．黒色粒．赤色粒．礫．E．外 - にぶい黄褐色．内 - 黒褐色．F．口縁部～底部 3/4．G．丸底．口縁部短く直立し下端に明瞭な稜を持つ．内面黒色処理．H．SI140 試掘．

第 13 表　第 143 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 〈11.5〉．器高 4.5．B．粘土紐積み上げ．C．外 - 口縁部ヨコナデ．体部～底部ヘラケズリ．内 - 口縁部ヨコナデ．体部～底部ナデ．D．白色粒．黒色粒．礫．E．内外 - 赤褐色．F．口縁部～底部 1/2．G．丸底．口縁部直立し下端に明瞭な稜を持つ．H．SI143 No.5．
2	土師器 高坏	A．口縁部径 12.0．器高 〈6.1〉．B．粘土紐積み上げ．C．外 - 口縁部ヨコナデ．体部ケズリ．脚部ナデ．内 - 口縁部～体部ヨコナデ．底部ナデ．D．白色粒．黒色粒．礫．土器片．E．内外 - 明赤褐色．F．口縁部～脚部 1/3．G．口縁部直立し下端に明確な稜を持つ．脚部欠損．H．SI143 No.15,d 区．

第 141 号住居跡（第 37 図）

E・F－5 グリッドに位置する。調査区の南東隅にあり、調査区外に延びている。重複する遺構はない。平面形態は方形である。規模は、長軸 4.20 m以上、短軸 4.20 m以上、深さ 0.14 mである。主軸方位は N－75°－E である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。

カマドは検出されなかったが、調査区外の東壁か南壁に設置されたものと考えられる。ここでは東壁を想定した。貯蔵穴やピット、壁溝は検出されなかった。

遺物は床面で確認できず、図化できる遺物も出土しなかった。

時期を特定できるような遺物は出土しなかったが、奈良・平安時代以降の遺物が出土していないことから、古墳時代後期と推定しておきたい。

第 37 図　第 141 号住居跡

第 142 号住居跡（第 38・39 図）

D・E－3・4 グリッドに位置する。SI138 と重複する。切り合い関係は明確でないが、遺構検出面の深度から SI138 より古いと思われる。平面形態は方形である。規模は、長軸 5.25 m、短軸 5.06 m以上、深さ 0.19 mである。主軸方位は N － 89°－ E である。覆土は 3 層で、黒褐色土を基調とする。床面は 2 層下面に硬化面が認められた。

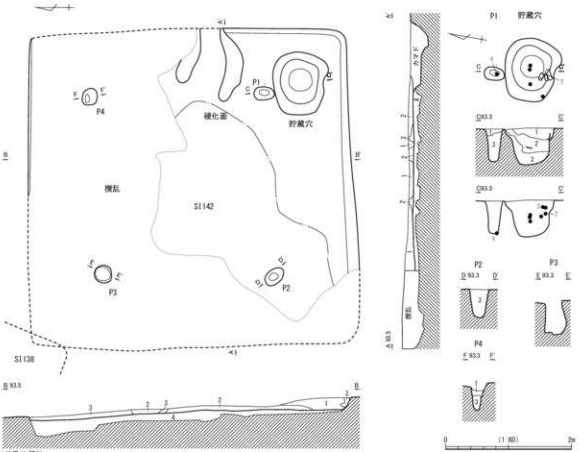
カマドは東壁に設置されている。規模は長さ 1.16 m、幅 1.06 mである。遺存状態は良くない。

貯蔵穴はカマドに向かって右側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.99 m、短軸 0.88 m、深さ 0.58 mである。

ピットは 4 基検出された。P 1 ～ 4 は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。壁溝は検出されなかった。

遺物は貯蔵穴周辺に多い。第 40 図 1 は搬入品の須恵器高坏である。2・3 は土師器高坏である。2 は蓋模倣坏に脚部が付くタイプである。4・5 は土師器の小型甕である。6・第 41 図 7・8 は土師器甕である。

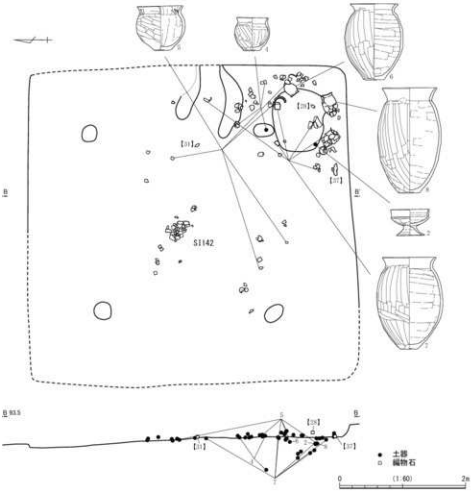
時期は古墳時代後期、土師器の形態的特徴から宮本編年Ⅳ期、6 世紀後半に位置付けられる。須恵器の編年的な形態的特徴もこれに整合的である。



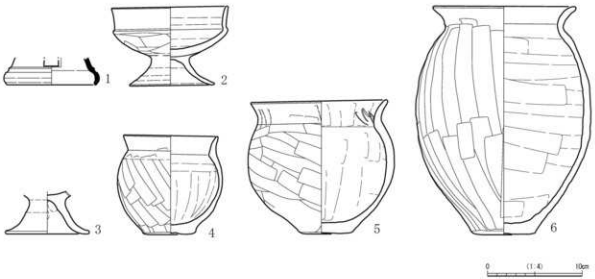
第142号住居跡
1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を少量，炭化物粒子(φ2.0～0.3cm)を微量含む。粘性ややなし，しまりややあり。
2．黒褐色土層(10YR2/2)，ローム粒子(φ0.5～3.0cm)を中量，炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)を中量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性ややあり，しまりややあり。
3．黄褐色土層(10YR5/6)，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)を極多量含む。ロームブロックを含む。粘性ややなし，しまりややあり。
4．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし，しまりややなし。

第142号住居跡貯蔵穴・P1～4
1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，炭化物粒子(φ0.5～2.0cm)を少量，焼土(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性ややあり，しまりややあり。
2．黒色土層(10YR2/1)，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，炭化物粒子(φ0.5～1.0cm)を中量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性ややあり，しまりややあり。
3．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.1～2.0cm)を中量，炭化物粒子(φ0.5～1.0cm)を微量含む。粘性ややあり，しまりややあり。

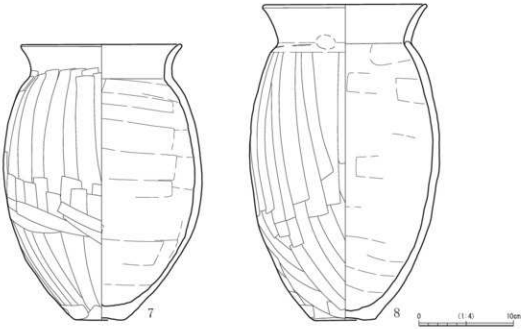
第 38 図　第 142 号住居跡



第 39 図　第 142 号住居跡遺物出土状況



第 40 図　第 142 号住居跡出土遺物（1）



第 41 図　第 142 号住居跡出土遺物（2）

第 14 表　第 142 号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 高坏	A．器高（1.9）、底部径（9.3）．B．ロクロ成形。C．外 - ロクロナデ。内 - ロクロナデ。D．白色粒、黒色粒．E．内外 - オリーブ黒色．F．脚部破片．G．SI133-2 と同一個体、搬入品。H．SI142 貯。
2	土師器 高坏	A．口縁部径 12.1、器高 8.3、底部径 8.7．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。脚柱部～裾部ヨコナデ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。脚部～裾部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英．E．内外 - 橙色．F．口縁部～脚部 2/3．G．口縁部直立し下端に明確な稜を持つ。裾部は広がる。H．SI142 貯 No.1。
3	土師器 高坏	A．器高（4.5）、底部径（8.9）．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 脚柱部～裾部ヨコナデ。内 - 器面摩滅のため調整不明。脚柱部～裾部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、礫．E．内外 - 明赤褐色。F．脚部 1/3．G．脚部内面に指頭痕が残る。裾部外反し広がる。H．SI142 c 区。
4	土師器 小型甕	A．口縁部径 9.8、器高 10.5、底部径 5.5．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後上端ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫．E．外 - 赤褐色。内 - にぶい赤褐色。F．口縁部～底部 3/4．G．上げ底。H．SI142 No.17,21,a 区 ,P1No.1。
5	土師器 小型甕	A．口縁部径 14.2、器高 14.0、底部径 5.2．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部ヨコケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫．E．外 - 赤褐色。内 - にぶい赤褐色。F．口縁部～底部 1/2．G．口縁部短く外反する。内外面ヘラ痕が残る。H．SI142 No.3,6,14,22,28,32,d 区 , 貯。
6	土師器 甕	A．口縁部径 14.7、器高 24.1、底部径 6.5．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、雲母、礫、土器片．E．内外 - 褐色。F．ほぼ完形。G．上げ底。口縁部外反する。胴部外面ススが付着。H．SI142 No.28。
7	土師器 甕	A．口縁部径 16.6、器高 29.1、底部径 5.2．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後中位及び下端ヨコケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫、土器片．E．内外 - 褐色。F．ほぼ完形。G．上げ底。口縁部外反する。H．SI142 No.22,33,38,40,a 区 , 貯 No.5, 貯 , ｶﾏﾄﾞ No.1。
8	土師器 甕	A．口縁部径 16.8、器高 33.4、底部径 6.4．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、石英、角閃石、礫．E．外 - 黒褐色。内 - にぶい褐色。F．ほぼ完形。G．上げ底。口縁部外反する。頸部外面に指頭痕が残る。胴部外面全体にススが付着。H．SI142 No.32,a 区。

第 144 号住居跡（第 42・43・44 図）

B・C－5 グリッドに位置する。SI148・153・158 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI158 より古く、SI148・153 より新しい。平面形態は方形である。規模は、長軸 4.40 m、短軸 4.33 m、深さ 0.26 m である。主軸方位は N － 89°－ E である。覆土は 4 層で、暗褐色土を基調とする。

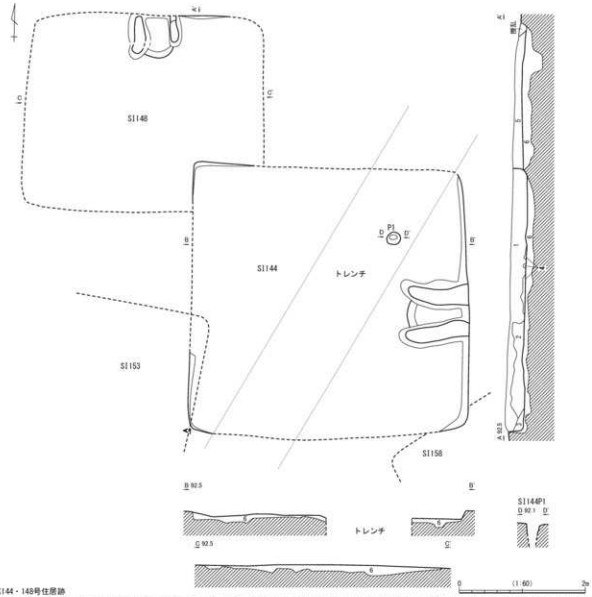
カマドは東壁に設置されている。規模は長さ 1.12 m、幅 1.10 m である。焚口部から約 0.65 m 入った底面の中心には、石製支脚が据えられていた。底面は概ね平坦で床面との段差はない。貯蔵穴は確

認されなかった。

ピットは１基検出された。Ｐ１は湧水のため底面まで掘削できなかったが、想定される深さと位置関係から柱穴になると思われる。ほかに対応する柱穴を検出することはできなかった。壁溝は検出されなかった。

遺物は僅かである。第 46 図１は土師器坏である。いわゆる北武蔵型坏で、口縁部が小さく内屈する深身の丸底形態である。２・３は土師器甕である。

時期は奈良時代、遺物が少なく細別時期の決定は難しいものの、遺構の切り合い関係と、北武蔵型坏の形態的特徴から宮本編年Ⅵ期、８世紀前半と考えておきたい。



第144・148号住居跡

1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.5～10.0cm)を中量、焼化物粒子(φ0.1～1.0cm)を少量、焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量。ロームブロックを含む。粘性あり、しまりややあり。
2．黒褐色土層(10YR2/2)，ローム粒子(φ0.5～10.0cm)を中量、焼化物粒子(φ0.1～1.0cm)を少量、焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量。ロームブロックを含む。粘性あり、しまりややあり。
3．褐色土層(10YR4/4)，ローム粒子(φ0.5～5.0cm)を中量、ロームブロックを含む。粘性あり、しまりややあり。
4．黄褐色土層(10YR5/6)，ローム粒子(φ0.5～5.0cm)を多量、ロームブロックを含む。粘性あり、しまりややあり。
5．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～10.0cm)を少量、焼化物粒子(φ0.5～1.0cm)を微量、焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量、ロームブロックを含む。粘性あり、しまりややあり。
6．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cmを多量含む。粘性ややなし、しまりややなし。

第 42 図　第 144・148 号住居跡（1）

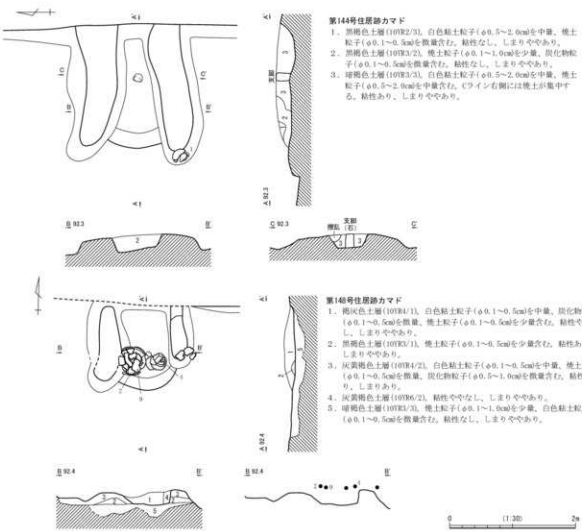
第 148 号住居跡（第 42・43・45 図）

B・C－5 グリッドに位置する。SI144 と重複する。遺構の切り合い関係から SI144 より古い。平面形態は方形である。規模は、長軸 3.79 m以上、短軸 3.12 m以上、深さ 0.17 mである。主軸方位は N－1°－E である。覆土は 1 層で、暗褐色土を基調とする。

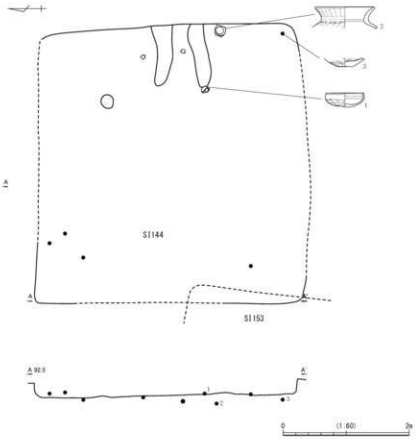
カマドは北壁に設置されている。規模は長さ 0.85 m、幅 0.69 mである。貯蔵穴やピット、壁溝は検出されなかった。

遺物は散漫だがやや南側に多い。第 47 図 1 ～ 4 は土師器坏である。全て蓋模倣坏で、身は深い。1 は口縁部が直線状だが、2 ～ 4 はやや外反している。5・8 は土師器鉢である。6 は土師器の小型甑である。7 は土師器甑で、胴部の張りが弱い。9 は土師器甕である。胴部に張りがあり、丸みを帯びている。10 は藤岡産の須恵器甕である。

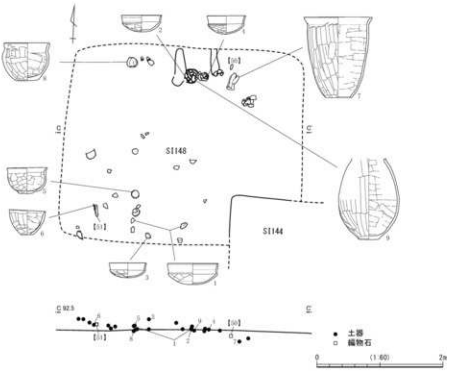
時期は古墳時代後期、土師器坏類の形態的特徴から宮本編年Ⅲ期、6 世紀前半に位置付けられる。



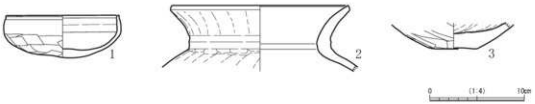
第 43 図　第 144・148 号住居跡（2）



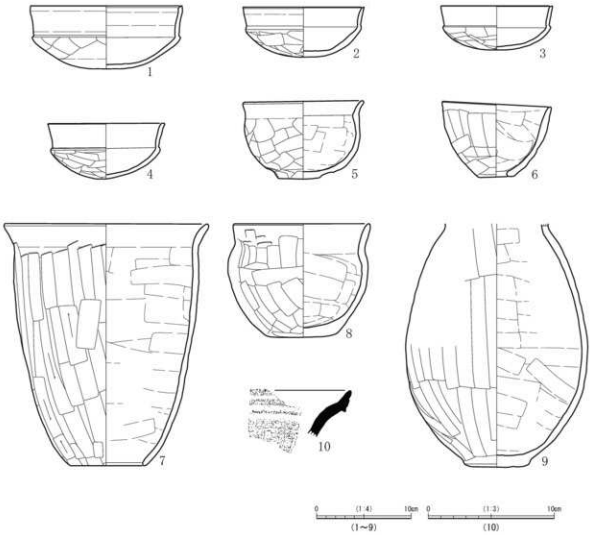
第 44 図　第 144 号住居跡遺物出土状況



第 45 図　第 148 号住居跡遺物出土状況



第 46 図　第 144 号住居跡出土遺物



第 47 図　第 148 号住居跡出土遺物

第 15 表　第 144 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 11.9、器高 4.5．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．口縁部～底部 2/3．G．丸底。口縁部内彎する。底部歪む。H．SI144 No.2、ｶﾏﾄﾞ。
2	土師器 甕	A．口縁部径 18.6、器高 (7.0)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部～胴部タテナデ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．口縁部～胴部上端 1/5。G．口縁部外反し下端に 2 本の凹線がめぐる。H．SI144No.1。
3	土師器 甕	A．器高 (2.8)、底部径 4.7。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 胴部下端ケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 胴部ナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．外 - にぶい赤褐色。内 - 橙色。F．底部破片。H．SI144 No.4。

第 16 表　第 148 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 16.0、器高 6.7。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、雲母、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．口縁部～底部 1/2。G．丸底。口縁部直立し上端部で内彎する。下端に明瞭な稜を持つ。H．SI148 No.15,19,e 区。
2	土師器 坏	A．口縁部径 12.8、器高 5.8。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、石英、礫。E．外 - 橙色。内 - 赤褐色。F．口縁部～底部 3/5。G．丸底。口縁部やや外傾し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI148 ｶﾏﾄﾞ No.2、ｶﾏﾄﾞ。
3	土師器 坏	A．口縁部径 (11.7)、器高 4.7。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．口縁部～底部 1/3。G．丸底。口縁部やや外傾し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI148 No.17。
4	土師器 坏	A．口縁部径 11.9、器高 5.9。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．口縁部～底部 2/3。G．丸底。口縁部やや外傾し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI148 ｶﾏﾄﾞ No.3、ｶﾏﾄﾞ。
5	土師器 鉢	A．口縁部径 12.4、器高 8.2、底部径 4.3。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ後ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．外 - 赤褐色。内 - 暗赤褐色。F．口縁部～底部 4/5。G．口縁部外反し短く開く。胴部～底部外面焼土が付着。H．SI148 No.20。
6	土師器 小型甑	A．口縁部径 11.4、器高 7.8、底部径 3.5。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部上半タテケズリ後下半ヨコケズリ。内 - 口縁部～胴部ナデ。D．白色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - にぶい橙色。内 - 橙色。F．ほぼ完形。G．鉢型。底部外面より穿孔。H．SI148 No.5、ｶﾏﾄﾞ。
7	土師器 甑	A．口縁部径 (21.3)、器高 25.5、底部径 (7.8)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫、土器片。E．外 - 橙色。内 - にぶい黄褐色。F．口縁部～底部 3/5。G．口縁部短く外傾する。H．SI148 No.22。
8	土師器 鉢	A．口縁部径 14.2、器高 12.0、底部径 7.3。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ後体部タテケズリ。底部ケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - にぶい褐色。内 - 明褐色。F．口縁部～底部 2/3。G．器形に歪みがある。口縁部やや開く。頸部外面ヘラ痕が残る。H．SI148 No.21。
9	土師器 甕	A．器高 〈25.7〉、底部径 6.8。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 胴部タテケズリ後下端ヨコケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - 暗褐色。内 - 褐色。F．胴部～底部 1/3。G．長胴甕。胴部中位以下に最大径。H．SI148 ｶﾏﾄﾞ No.1、ｶﾏﾄﾞ。
10	須恵器 甕	A．器高 〈3.7〉。B．ロクロ成形。C．外 - ロクロナデ。内 - ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英。E．外 - 黄灰色。内 - 灰黄色。F．口縁部～頸部破片。G．口縁部下端に稜を持つ。頸部外面に 4 本 1 単位の櫛歯状工具で狭い波状文を施す。勝岡産。H．SI148 e 区。

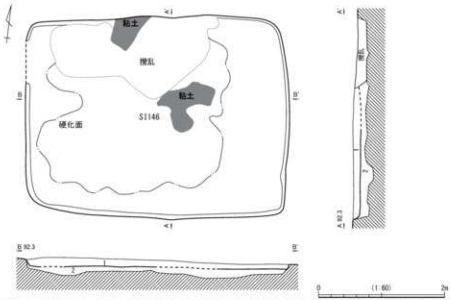
第 146 号住居跡（第 48 図）

B－5 グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は長方形である。規模は、長軸 4.16 m、短軸 3.25 m、深さ 0.11 m である。主軸方位は N － 1°－ W である。覆土は 1 層で、暗褐色土を基調とする。床面は 1 層下面に硬化面が認められた。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、北壁で白色粘土のまとまりを確認したことから、本来こちら側にカマドが設置されていたものと思われる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

遺物は床面上で僅かに出土した。第 49 図 1・2 は土師器甕である。第 50 図 3 は未野産かと思われる須恵器甕である。4 は砥石である。

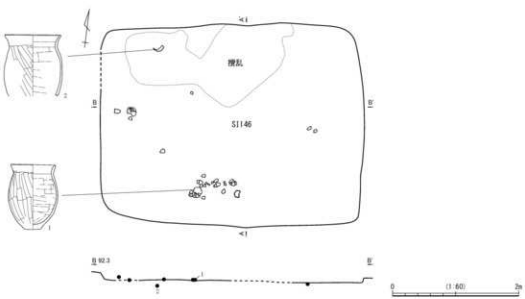
時期は古墳時代後期、編年的な位置付けの基準となる遺物が少なく細別時期の決定は難しいが、宮本編年Ⅳ～Ⅴ期、6 世紀後半から 7 世紀前半と考えておきたい。



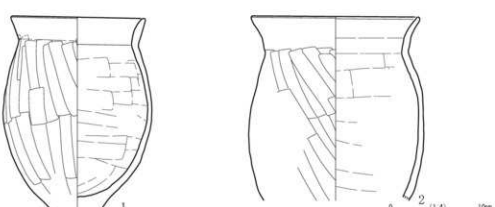
第146号住居跡

1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量，炭化物粒子(φ0.1～1.0cm)を微量，ロームブロックを含む。粘性あり，しまりややなし。

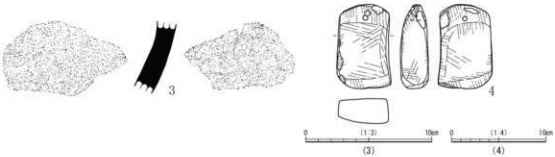
2．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし，しまりややなし。



第 48 図　第 146 号住居跡・遺物出土状況



第 49 図　第 146 号住居跡出土遺物（1）



第 50 図　第 146 号住居跡出土遺物（2）

第 17 表　第 146 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A．口縁部径 13.9, 器高 20.5, 底部径 5.3．B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、礫。E．内外 - にぶい褐色。F．口縁部～底部 4/5。G．口縁部やや外反する。H．SI146 No.1,c 区 ,d 区。
2	土師器 甕	A．口縁部径 17.5, 器高〈19.4〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、雲母、角閃石、礫。E．内外 - にぶい黄褐色。F．口縁部～胴部 1/5。G．長胴甕。口縁部外反する。H．SI146 No.5,d 区。
3	須恵器 甕	B．粘土紐積み上げ。C．外 - 平行のタタキ目。内 - ナデ。D．白色粒、礫。E．外 - 灰色。内 - 暗赤褐色。F．胴部破片。G．末野産？H．SI146 a 区。
4	石製品 砥石	A．長 8.9、幅 5.7、厚 2.9、重 217.1g。C．上部中央に表裏面からの穿孔により貫通した孔がある。欠損面も利用により平滑化している。左側面は凹状。F．完形。H．SI146 a 区。

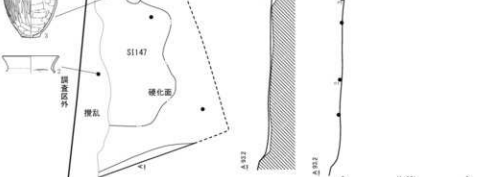
第 147 号住居跡（第 51 図）

C－2・3 グリッドに位置する。調査区の西隅にあり、調査区外に延びている。重複する遺構はない。平面形態は方形になると思われる。規模は、長軸 3.21 m以上、短軸 2.80 m以上、深さ 0.09 mである。主軸方位は N－7°－E である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。

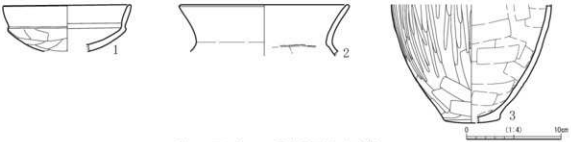
カマドは北壁に設置されている。規模は長さ 0.82 m以上、幅 0.43 m以上である。右袖の一部のみが残存しており、遺存状態は良くない。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

遺物は僅かながらカマドや床面から出土している。第 52 図 1 は土師器坏である。蓋模倣坏で、身はやや浅く、口縁部は外反している。2・3 は土師器甕である。

時期は古墳時代後期、土師器坏類の形態的特徴から宮本編年Ⅳ期、6 世紀後半に位置付けられる。



第 51 図　第 147 号住居跡



第 52 図　第 147 号住居跡出土遺物

第 18 表　第 147 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 13.3、器高〈4.9〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、雲母、礫。E．外 - 赤褐色。内 - 褐色。F．口縁部～底部 1/3。G．丸底。口縁部外傾し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI147 ﾋｽﾄﾞ No.1, ﾋｽﾄﾞ ,一括。
2	土師器 甕	A．口縁部径 (17.8)、器高〈6.9〉。B．粘土紐積み上げ。C．内外 - 口縁部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．外 - にぶい橙色。内 - 明褐色。F．口縁部破片。G．口縁部外傾する。頸部外面ヘラ痕が残る。H．SI147 No.5, 一括。
3	土師器 甕	A．器高〈12.5〉、底部径 (5.9)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 胴部タテケズリ後中位タテミガキ。底部ヘラケズリ。内 - 胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、雲母、礫。E．外 - 褐色。内 - 橙色。F．胴部中位～底部 1/5。H．SI147 No.6, 一括。

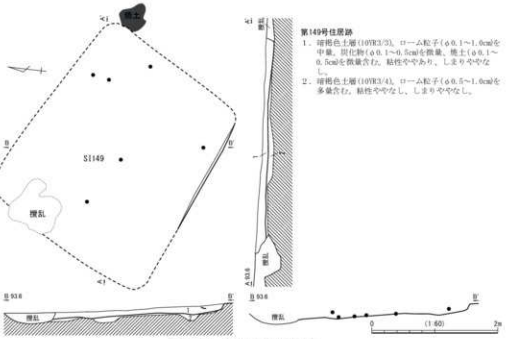
第 149 号住居跡（第 53 図）

Ｅ－４・５グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は長方形である。規模は、長軸 3.41 m以上、短軸 3.02 m以上、深さ 0.12 mである。主軸方位は N － 59°－ W である。覆土は 1 層で、暗褐色土を基調とする。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、東壁で焼土のまとまりを確認したことから、本来こちら側にカマドが設置されていたものと思われる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

遺物は散漫である。第 54 図 1 は搬入品の須恵器提瓶か壷と思われる。

時期の特定は難しい。出土遺物が限られていることから、遺構の平面形態や、カマドの想定位置から平安時代と考えておきたい。



第 53 図　第 149 号住居跡

第 54 図　第 149 号住居跡出土遺物

第 19 表　第 149 号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 提瓶？	B．ロクロ成形。C．内外 - 強いヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、雲母、礫。E．外 - 黄灰色。内 - 灰黄色。F．胴部破片。G．搬入品。H．SI149 c 区。

第 151 号住居跡（第 55・56・57 図）

D－４・５グリッドに位置する。SI143・153 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI143・153 より古い。平面形態は方形である。規模は、長軸 4.44 m、短軸 2.85 m以上、深さ 0.15 mである。主軸方位は N － 87°－ W である。覆土は１層で、暗褐色土を基調とする。床面は３層下面に硬化面が認められた。

カマドは東壁に設置されている。規模は長さ 1.09 m、幅 0.81 mである。

貯蔵穴はカマドに向かって右側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.98 m、短軸 0.75 m、深さ 0.75 mである。

ピットは３基検出された。Ｐ１～３は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。本来Ｐ１の対角線上に配置されていたであろう主柱穴は検出できなかった。壁溝は検出されなかった。

遺物はカマド周辺と南壁に多い。第 59 図１～３は土師器坏である。いわゆる蓋模倣坏で、身が深い。１・２は口縁部が直線的に立ち上がり、３はやや外反する。４は土師器鉢、５は土師器小型甕、６は土師器甑である。胴部の張りがやや弱い。７は土師器甕である。やや長胴化しているが、球胴の範囲であろう。

時期は古墳時代後期、土師器の形態的特徴から宮本編年Ⅱ期、５世紀末から６世紀初頭に位置付けられる。

第 153 号住居跡（第 55・56・58 図）

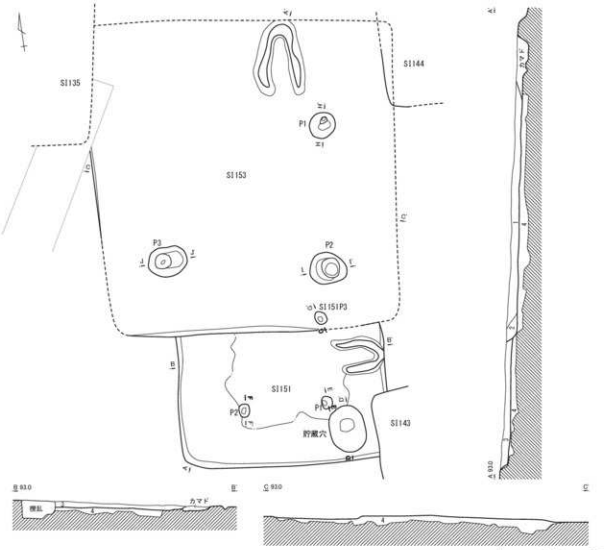
C・D－４・５グリッドに位置する。SI135・144・151 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI144 より古く、SI135・151 より新しい。平面形態は方形である。規模は、長軸 6.58 m以上、短軸 6.47 m以上、深さ 0.22 mである。主軸方位は N － 7°－ E である。覆土は２層で、暗褐色土を基調とする。

カマドは北壁に設置されている。規模は長さ 1.60 m、幅 1.10 mである。貯蔵穴は確認されなかった。

ピットは３基検出された。Ｐ１～３は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。本来Ｐ２の対角線上に配置されていたのであろう。主柱穴は検出できなかった。壁溝は検出されなかった。

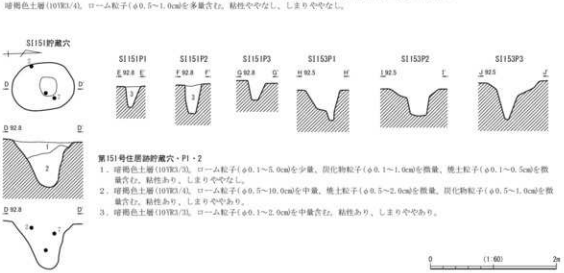
遺物は覆土中から多く出土したが、記録できた床面上の遺物は散漫である。第 60 図１～３は土師器坏である。いずれも口縁部が外反する。１・３は蓋模倣坏である。１は身が浅く、３は底部が平底化している。２は大振りの有段口縁坏である。４は土師器高坏である。５は藤岡産の須恵器甕である。

時期は古墳時代後期、土師器の形態的特徴から宮本編年Ⅳ期、６世紀後半に位置付けられる。



第151・153号住居跡

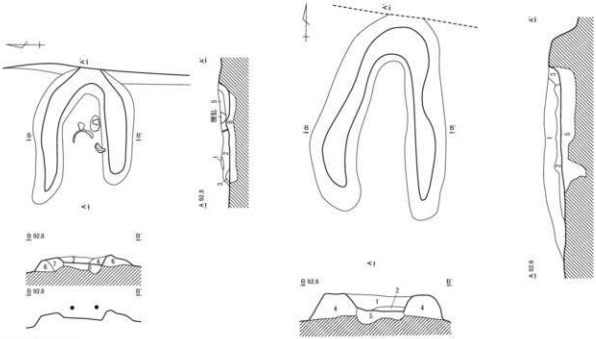
1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～2.0cm)を中量，炭化物粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。
2．黒褐色土層(10YR2/2)，ローム粒子(φ0.5～5.0cm)を中量含む。粘性あり，しまりややあり。
3．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)を中量，炭化物粒子(φ0.5～1.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。
4．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし，しまりややなし。



第151号住居跡貯蔵穴・P1・2

1．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～5.0cm)を少量，炭化物粒子(φ0.1～1.0cm)を微量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性あり，しまりややなし。
2．暗褐色土層(10YR3/4)，ローム粒子(φ0.5～10.0cm)を中量，焼土粒子(φ0.5～2.0cm)を微量，炭化物粒子(φ0.5～1.0cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。
3．暗褐色土層(10YR3/3)，ローム粒子(φ0.1～2.0cm)を中量含む。粘性あり，しまりややあり。

第 55 図　第 151・153 号住居跡（1）



第151号住居跡カマド

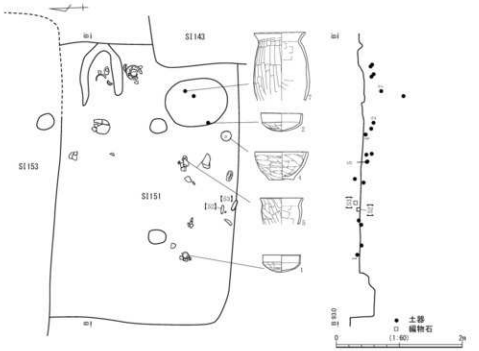
1．黒色土層(10YR2/1)，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を極多量，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を多量含む。粘性あり，しまりややなし。
2．暗褐色土層(10YR3/3)，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を中量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)多量含む。粘性あり，しまりややなし。
3．暗褐色土層(10YR3/4)，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を極多量含む。粘性あり，しまりややなし。
4．暗褐色土層(10YR3/4)，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性あり，しまりややあり。
5．褐灰色土層(10YR4/1)，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を極多量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性なし，しまりあり。
6．灰白色土層(10YR7/1)，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を微量含む。粘性あり，しまり強い。
7．黒褐色土層(10YR3/2)，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，白色粘土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性なし，しまりあり。
8．黒褐色土層(10YR2/3)，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を少量，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を少量含む。粘性なし，しまりややあり。

第153号住居跡カマド

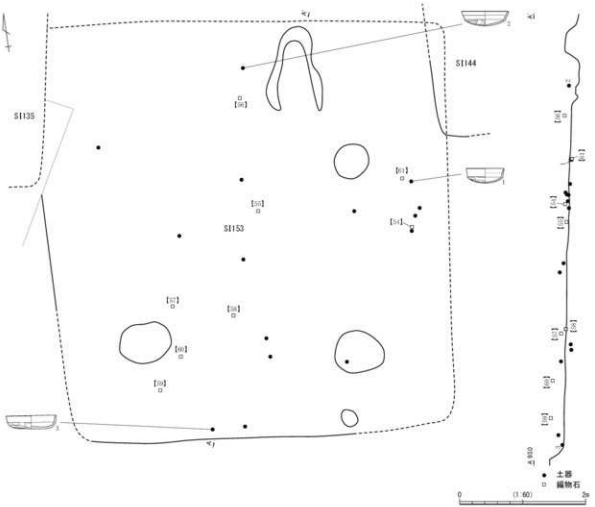
1．にぶい黒褐色土層(10YR5/3)，白色粘土粒子(φ0.1～1.0cm)を多量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，ローム粒子(φ0.1～1.0cm)中量含む。粘性あり，しまりあり。
2．暗褐色土層(10YR3/3)，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)微量含む。粘性あり，しまりややあり。
3．灰黄褐色土層(10YR5/2)，白色粘土粒子(φ0.5～1.0cm)を少量，焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を微量，炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)微量含む。粘性あり，しまりややあり。
4．灰白色土層(10YR7/1)，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を中量含む。粘性なし，しまり強い。
5．暗褐色土層(10YR3/3)，焼土粒子(φ0.1～1.0cm)を極多量含む。粘性なし，しまりあり。

0　(1:20)　2m

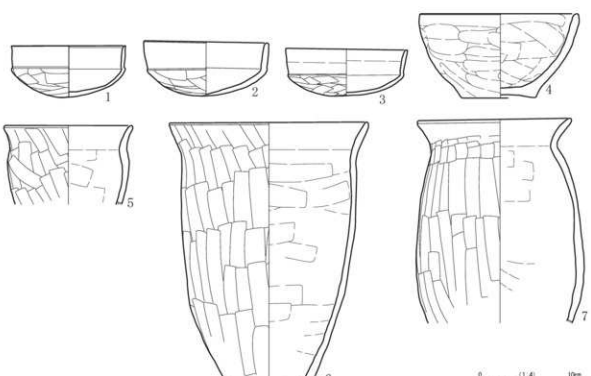
第 56 図　第 151・153 号住居跡（2）



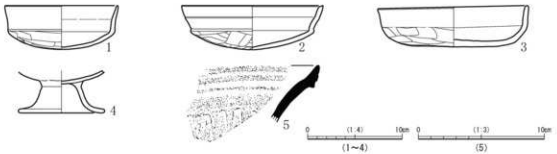
第 57 図　第 151 号住居跡遺物出土状況



第 58 図　第 153 号住居跡遺物出土状況



第 59 図　第 151 号住居跡出土遺物



第 60 図　第 153 号住居跡出土遺物

第 20 表　第 151 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 12.0、器高 5.4、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、石英、礫。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．口縁部～底部はほぼ完形。G．丸底。底部歪む。口縁部直立し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI151 No.6。
2	土師器 坏	A．口縁部径 12.9、器高 5.7、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、赤色粒、石英、礫。E．外 - 赤褐色。内 - 褐色。F．口縁部～底部完形。G．丸底。口縁部直立し下端に弱い稜を持つ。H．SI151 貯 No.1。
3	土師器 坏	A．口縁部径 12.8、器高 4.9、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．口縁部～底部 4/5。G．丸底。口縁部やや外傾し下端に明瞭な稜を持つ。内外面ススが付着。H．SI151 b 区。
4	土師器 鉢	A．口縁部径 16.4、器高 8.9、底部径 7.8、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部下半タテナデ後上半ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～底部ナデ。D．白色粒、礫。E．外 - 明赤褐色。内 - 明褐色。F．口縁部～底部 2/3。H．SI151 No.12, 試掘。
5	土師器 小型甕	A．口縁部径 13.3、器高 (8.4)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部タテケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。D．白色粒、石英、礫。E．外 - にぶい橙色。内 - にぶい黄褐色。F．口縁部～胴部 1/2。G．丸底。口縁部やや外傾する。H．SI151 No.10,11。
6	土師器 甕	A．口縁部径 20.7、器高 27.5、底部径 8.4。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部～胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、角閃石、礫。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．口縁部～底部 9/10。G．口縁部やや外傾する。H．SI151 No.3,d 区 , 試掘 ,D5。
7	土師器 甕	A．口縁部径 16.0、器高 〈21.5〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、赤色粒、石英、角閃石、礫。E．外 - 暗褐色。内 - 褐色。F．口縁部～胴部 2/3。G．長胴甕。口縁部外反する。H．SI151 貯 No.1,2,3。

第 21 表　第 153 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 13.8、器高 4.6、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、石英、礫。E．内外 - 橙色。F．口縁部～底部 1/2。G．丸底。口縁部やや外反して下端に明瞭な稜を持つ。H．SI153 No.5。
2	土師器 坏	A．口縁部径 14.9、器高 4.7、B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石、礫。E．内外 - にぶい橙色。F．口縁部～底部 3/4。G．丸底。口縁部外傾し開き下端に明瞭な稜を持つ。H．SI153 No.1。
3	土師器 坏	A．口縁部径 15.7、器高 4.2、底部径 8.5。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．外 - 黒褐色。内 - 暗赤褐色。F．完形。G．器形歪む（口縁部波打つ）。H．SI153 No.10。
4	土師器 高坏	A．器高 〈4.5〉、底部径 〈9.2〉。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 体部ケズリ。脚柱部～裾部ヨコナデ。内 - ナデ。D．白色粒、角閃石、石英、礫。E．外 - 橙色。内 - にぶい橙色。F．底部～脚部 1/4。G．裾部外反し広がる。H．SI153 e 区。
5	須恵器 甕	A．器高 〈4.5〉。B．ロクロ成形。C．外 - ロクロナデ。内 - ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．外 - 灰黄色。内 - 灰オリーブ色。F．口縁部破片。G．口縁部下端に稜を持つ。頸部外面に棒状工具で挟い波状文を施す。藤岡産。H．SI153 e 区。

第 152 号住居跡（第 61・62 図）

Ｅ－３・４グリッドに位置する。SI156 と重複する。遺構の切り合い関係から SI156 より新しい。平面形態は長方形である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。規模は、長軸 4.79 m以上、短軸 4.07 m以上である。主軸方位は N － 79°－ W である。

明確なカマドは検出されなかったが、主柱穴や貯蔵穴の位置関係から、東壁に設置されていた可能性が高い。

貯蔵穴は南東側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.63 m、短軸 0.47 m以上、深さ 0.50 mである。

ピットは４基検出された。Ｐ１～４は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。壁溝は検出されなかった。

遺物は僅かである。第 63 図１は土師器坏である。蓋模倣坏で、身が浅く口縁部が外反している。

時期は古墳時代後期、遺物が少なく細別時期の決定は難しいが宮本編年Ⅳ～Ⅴ期、６世紀後半から７世紀前半と考えておきたい。

第 156 号住居跡（第 61・62 図）

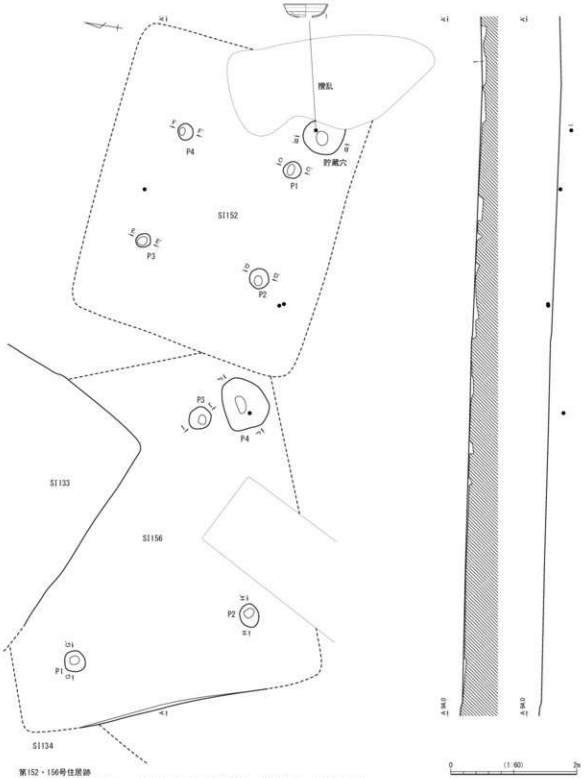
Ｅ－２・３グリッドに位置する。SI133・134・152 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI133・134 より新しく、SI152 より古い。平面形態は方形である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。規模は、長軸 5.40 m、短軸 4.94 mである。主軸方位は N － 70°－ E である。

明確なカマドは検出されなかった。遺構の検出状況から、北壁に設置されていたかと思われる。

ピットは４基検出された。Ｐ１～３は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。Ｐ４はカマドに向かって右側に位置する貯蔵穴であろう。平面形態は楕円形で、規模は長軸 0.86 m、短軸 0.72 m、深さ 0.42 mである。壁溝は検出されなかった。

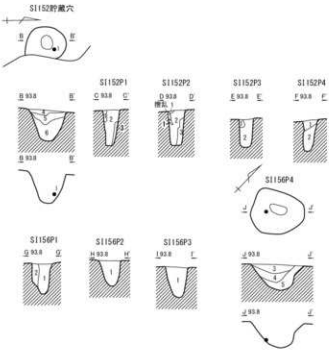
遺物は極めて少ない。図化できる遺物はなかった。

時期は古墳時代後期、遺物が少なく細別時期の決定は難しいが、奈良・平安時代以降の遺物が出土していないことから宮本編年Ⅳ～Ⅴ期、６世紀後半から７世紀前半と考えておきたい。



第152・156号住居跡
1．暗褐色土層(10YR3/4)、ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし、しまりややなし。

第 61 図　第 152・156 号住居跡（1）



第 62 図　第 152・156 号住居跡（2）

第 63 図　第 152 号住居跡出土遺物

第 22 表　第 152 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径 13.9，器高（4.2）。B．粘土紐積み上げ。C．外－口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内－口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、礫。E．外－黒褐色。内－暗赤褐色。F．口縁部～底部 1/5。G．丸底。口縁部外傾し下端に弱い稜を持つ。H．SI152 貯 No.1。

第 154 号住居跡（第 64 図）

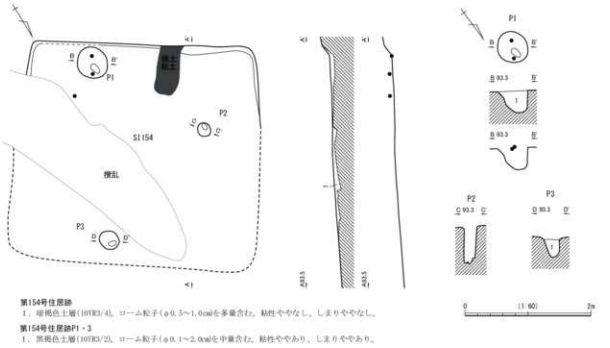
D・E－4・5 グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は方形である。規模は、長軸 3.93 m以上、短軸 3.52 m以上、深さ 0.12 mである。主軸方位は N － 33°－ E である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、南壁で焼土や粘土のまとまりを確認したことから、本来こちら側にカマドが設置されていたものと思われる。

ピットは 3 基検出された。P 1 はやや小規模だがカマドに向かって左側に位置する貯蔵穴の可能性がある。平面形態は円形で、規模は長軸 0.52 m、短軸 0.47 m、深さ 0.36 mである。P 2 は深く主柱穴の可能性もあるが、対応する柱穴を確認することができなかった。P 3 は浅く、不規則であり、住居跡に伴う柱穴ではないかもしれない。壁溝は検出されなかった。

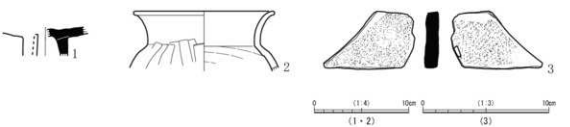
遺物は僅かである。第 65 図 1 は末野産かと思われる高坏である。2 は土師器甕である。3 は須恵器の転用砥である。

時期は古墳時代後期、遺物が少なく細別時期の決定は難しいが宮本編年Ⅳ～Ⅴ期、6 世紀後半から 7 世紀前半と考えておきたい。



第154号住居跡
1．暗褐色土層(10YR3/4)．ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし。しまりややなし。
第154号住居跡P1・3
1．黒褐色土層(10YR3/2)．ローム粒子(φ0.1～2.0cm)を中量含む。粘性ややあり。しまりややあり。

第 64 図　第 154 号住居跡



第 65 図　第 154 号住居跡出土遺物

第 23 表　第 154 号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 高坏	A．器高〈2.9〉。B．ロクロ成形。C．外-ロクロナデ。内-ロクロナデ。D．白色粒、黒色粒。E．内外-灰色。F．底部～脚部1/5。G．脚部透かしは内面から穿孔。3単位。末野産？H．SI154試掘。
2	土師器 甕	A．口縁部径(14.8)、器高〈5.9〉。B．粘土紐積み上げ。C．外-口縁部ヨコナデ、胴部タテケズリ。内-口縁部～胴部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．内外-橙色。F．口縁部～胴部上端破片。G．口縁部外反する。H．SI154a区。
3	須恵器 転用砥	A．口縁部径4.6、器高7.2、底部径1.2。C．須恵器甕の胴部。割れ口・表・裏面とも転用砥として使用。全体に丸みを帯びる。D．白色粒、礫。E．外-灰色。内-暗赤褐色。F．胴部破片。H．SI154d区。

第 155 号住居跡（第 66 図）

E－5グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は方形である。規模は、長軸2.68 m以上、短軸2.35 m以上、深さ0.11 mである。主軸方位はN－71°－Eである。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。

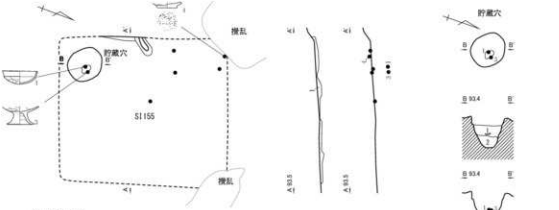
明確なカマドは検出されなかった。ただし、西壁でカマド袖状の粘土のまとまりを確認したことから、本来ここにカマドが設置されていたものと思われる。

貯蔵穴はカマドに向かって左側に位置する。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.56 m、短軸0.50 m、

深さ0.50 mである。ピットや壁溝は確認されなかった。

遺物は僅かである。第67図1・2は土師器坏である。いずれも蓋模倣坏で、身が浅く、口縁部が外反している。1は特に小型化が進んでいる。3は土師器高坏である。4は土師器甕である。

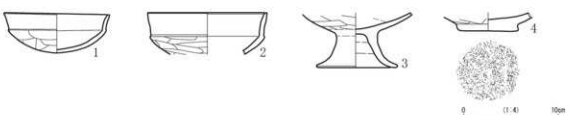
時期は古墳時代後期、土師器坏の小型化が進んでいることから宮本編年Ⅴ期、7世紀前半に位置付けておきたい。



第155号住居跡
1．暗褐色土層(10YR3/4)、ローム粒子(φ0.5～1.0cm)を多量含む。粘性ややなし。しまりややなし。

第155号住居跡貯蔵穴
1．暗褐色土層(10YR3/3)、白色粘土粒子(φ0.5～1.0cm)を少量。焼土粒子(φ0.1～0.5cm)を少量、炭化物粒子(φ0.5～1.0cm)を少量含む。粘性あり。しまりややあり。
2．暗褐色土層(10YR3/4)、炭化物粒子(φ0.1～0.5cm)を微量含む。粘性あり。しまりややあり。

第66図　第155号住居跡



第67図　第155号住居跡出土遺物

第24表　第155号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A．口縁部径10.0、器高4.2。B．粘土紐積み上げ。C．外-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内-口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、雲母、礫。E．外-にぶい赤褐色。内-明赤褐色。F．口縁部～底部2/3。G．丸底。器形歪む。口縁部外傾し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI155 貯 No.1。
2	土師器 坏	A．口縁部径12.5、器高〈4.4〉。B．粘土紐積み上げ。C．外-口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内-口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、石英、礫。E．外-橙色。内-褐色。F．口縁部～底部1/4。G．丸底。口縁部やや外反し下端に明瞭な稜を持つ。H．SI155 貯。
3	土師器 高坏	A．器高〈5.8〉、底部径8.1。B．粘土紐積み上げ。C．外-体部ケズリ。脚柱部～裾部ヨコナデ。内-底部ナデ。脚部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、礫。E．外-明赤褐色。内-赤褐色。F．体部～脚部1/3。G．裾部外反し広がる。H．SI155 貯 No.2、貯。
4	土師器 甕	A．器高〈1.9〉、底部径6.3。B．粘土紐積み上げ。C．外-胴部下端ヘラケズリ。内-底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、雲母、礫。E．外-褐色。内-橙色。F．底部1/10。G．底部木葉痕が残る。H．SI155 No.5。

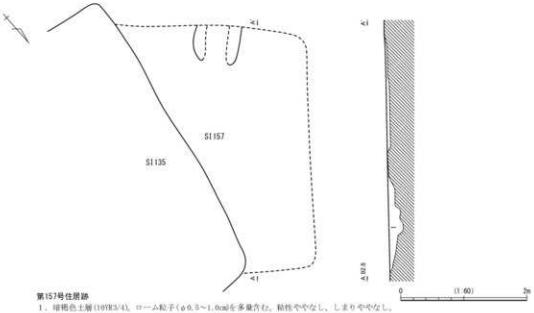
第 157 号住居跡（第 68 図）

B・C－3、B－4 グリッドに位置する。SI135 と重複する。遺構の切り合い関係から SI135 より新しい。平面形態は方形である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。規模は、長軸 3.95 m以上、短軸 3.12 m以上である。主軸方位は N－41°－E である。

カマドは南壁に設置されている。規模は長さ 0.75 m、幅 0.62 mである。遺存状態は良くない。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

遺物はほとんど出土していない。第 69 図 1 は土師器高坏である。2 は土師器小型甕である。

時期は古墳時代後期、遺物が少なく細別時期の決定は難しいが宮本編年Ⅳ～Ⅴ期、6 世紀後半から 7 世紀前半と考えておきたい。



第157号住居跡
1．褐色土層（10YR3/4）。ローム粒子（φ0.5～1.0cm）を多量含む。粘性ややなし、しまりややなし。

第 68 図　第 157 号住居跡

第 69 図　第 157 号住居跡出土遺物

第 25 表　第 157 号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 高坏	A．器高(5.8)、底部径(8.8)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 体部ケズリ。脚柱部～裾部ヨコナデ。内 - 底部ケズリ。脚部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒、角閃石、礫。E．外 - 明赤褐色。内 - 赤褐色。F．体部～脚部 1/3。G．裾部外反し広がる。H．SI157 試掘。
2	土師器 小型甕	A．器高(5.2)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 胴部ヨコケズリ。底部ケズリ。内 - 胴部～底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫、土器片。E．外 - 明赤褐色。内 - 赤褐色。F．胴部～底部 1/5。G．丸底。胴部外面にススが付着。H．SI157 試掘。

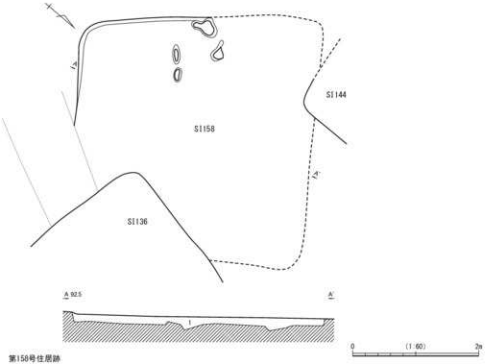
第 158 号住居跡（第 70 図）

C－5・6グリッドに位置する。SI136・144 と重複する。遺構の切り合い関係から、SI136・144 より新しい。平面形態は方形である。遺構確認面がほぼ床面であり、遺存状態は良くない。規模は、長軸 3.85 m以上、短軸 3.81 m以上である。主軸方位は N － 49°－ E である。

明確なカマドは検出されなかった。ただし、東壁で粘土のまとまりを確認したことから、本来こちら側にカマドが設置されていたものと思われる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

遺物は僅かである。第 71 図 1 は末野産の高台付埦である。

時期は平安時代、出土遺物が限られていることから、細別時期の決定は難しいが宮本編年Ⅷ～Ⅸ期、9 世紀代と考えられる。



第 70 図　第 158 号住居跡

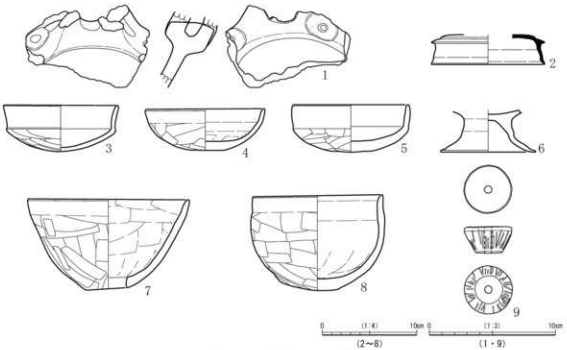
第 71 図　第 158 号住居跡出土遺物

第 26 表　第 158 号住居跡出土遺物観察表

1	須恵器 高台付埦	A．器高(2.2)、底部径 6.4。B．ロクロ成形。C．外 - ヨコナデ。底部回転糸切り離し後、高台貼付け。内 - ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、赤色粒。確。E．外 - にぶい黄褐色。内 - にぶい褐色。F．体部～底部 1/3。G．末野産。H．SI158 一括。

第３節　　遺構外出土遺物

遺構に伴わないグリッド出土遺物を掲載した。第 72 図１は縄文土器の深鉢である。２は陶邑産の須恵器蓋である。３～５は土師器坏である。６は土師器高坏である。７は土師器小型甑である。８は土師器鉢である。９は滑石製の紡錘車である。



第 72 図　遺構外出土遺物

第 27 表　遺構外出土遺物観察表

1	縄文土器 深鉢	B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部に環状の突起。口縁頂部に竹管状工具による縦横方向の刺突。器面はナデ。内 - ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、雲母、角閃石。E．外 - 橙色。内 - にぶい褐色。F．口縁部破片。H．D5。
2	須恵器 蓋	A．口縁部径 (12.0)、器高 (3.2)。B．ロクロ成形。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部回転ヘラケズリ。内 - ロクロナデ。D．白色粒、黒色粒。E．内外 - 灰色。F．口縁部～底部 1/10。G．口縁部下端に鋭い稜を持つ。陶邑産。H．E1。
3	土師器 坏	A．口縁部径 11.9、器高 4.9。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 器面磨滅のため調整不明。D．白色粒、黒色粒、雲母、礫。E．外 - 橙色。内 - 明赤褐色。F．ほぼ完形。G．丸底。口縁部直立し下端に明瞭な稜を持つ。H．C4。
4	土師器 坏	A．口縁部径 12.4、器高 4.4、底部径 3.3。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．外 - にぶい橙色。内 - にぶい褐色。F．ほぼ完形。G．丸底。口縁部やや開く。H．D5。
5	土師器 坏	A．口縁部径 12.0、器高 5.0。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～体部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、角閃石、礫。E．外 - にぶい赤褐色。内 - 赤褐色。F．口縁部～底部 3/5。G．緩い丸底。口縁部下端に弱い稜を持つ。H．E3。
6	土師器 高坏	A．器高 (4.4)、底部径 (10.0)。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 脚柱部～裾部ヨコナデ。内 - 底部ナデ。脚部ヨコナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．内外 - 明赤褐色。F．底部～脚部 1/3。G．裾部外反し広がる。H．B6。
7	土師器 小型甑	A．口縁部径 16.9、器高 9.5、底部径 4.3。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部タテケズリ後上位ヨコケズリ。内 - 口縁部～胴部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫。E．外 - 橙色。内 - にぶい褐色。F．口縁部～底部 3/4。G．鉢型。底両面より穿孔。H．D5。
8	土師器 鉢	A．口縁部径 13.6、器高 10.0、底部径 6.0。B．粘土紐積み上げ。C．外 - 口縁部ヨコナデ。胴部ヨコケズリ。底部ヘラケズリ。内 - 口縁部～胴部ヨコナデ。底部ナデ。D．白色粒、黒色粒、石英、礫、土器片。E．外 - 橙色。内 - にぶい褐色。F．ほぼ完形。G．口縁部直立する。H．D5。
9	石製品 紡錘車	A．直径 3.8、穿孔径 0.6、厚さ 2.1。C．全体に平滑。側面に放射状のキザミ。D．滑石 F．完形。H．E2。

第 28 表　編物石一覧表

番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石質	遺構	出土位置
【1】	14.3	3.1	1.7	100.0	結晶片岩	SI132	SI132 No.35
【2】	13.1	4.8	2.3	263.2	結晶片岩	SI132	SI132 d 区
【3】	12.7	5.8	5.0	570.5	結晶片岩	SI132	SI132 No.13
【4】	15.2	6.2	5.7	771.2	結晶片岩	SI132	SI132 c 区
【5】	16.5	8.3	5.4	1150.0	結晶片岩	SI132	SI132 No.44
【6】	18.3	4.8	1.9	291.4	結晶片岩	SI133	SI133 No.38
【7】	12.5	6.2	3.8	403.1	結晶片岩	SI133	SI133 No.48
【8】	15.0	8.2	2.9	557.3	結晶片岩	SI133	SI133 P3
【9】	13.8	6.5	5.3	593.1	砂岩	SI133	SI133 No.31
【10】	16.9	8.0	3.5	667.8	結晶片岩	SI133	SI133 No.17
【11】	16.0	7.4	5.0	850.2	結晶片岩	SI133	SI133 No.2
【12】	12.0	6.8	2.3	274.0	結晶片岩	SI135	SI135 b 区
【13】	20.6	7.8	2.4	574.5	結晶片岩	SI135	SI135 No.1
【14】	16.2	6.9	3.7	574.8	結晶片岩	SI135	SI135 No.10
【15】	14.2	8.0	3.8	603.6	結晶片岩	SI135	SI135 No.18
【16】	12.5	9.5	3.6	636.1	結晶片岩	SI135	SI135 No.22
【17】	15.5	7.3	3.8	667.5	結晶片岩	SI135	SI135 No.20
【18】	12.4	6.5	5.7	683.4	結晶片岩	SI135	SI135 d 区
【19】	16.9	5.5	6.0	888.1	結晶片岩	SI135	SI135 No.19
【20】	15.2	8.9	4.6	904.1	結晶片岩	SI135	SI135 d 区
【21】	11.3	9.4	1.3	226.5	緑泥片岩	SI136	SI136 No.15
【22】	12.1	3.6	1.6	95.1	結晶片岩	SI137	SI137 n 区
【23】	16.4	4.7	1.9	227.7	結晶片岩	SI138	SI138 No.6
【24】	6.6	3.5	1.4	52.9	結晶片岩	SI139	SI139 c 区
【25】	13.0	3.2	2.2	151.2	結晶片岩	SI139	SI139 No.9
【26】	15.6	4.7	2.0	210.6	結晶片岩	SI139	SI139 No.6
【27】	5.4	3.0	0.6	17.2	結晶片岩	SI140	SI140 e 区
【28】	7.4	4.5	0.7	45.7	緑泥片岩	SI142	SI142 No.30
【29】	5.5	3.6	2.2	50.0	結晶片岩	SI142	SI142 貯
【30】	6.6	4.7	1.4	56.3	緑泥片岩	SI142	SI142 b 区
【31】	7.9	3.7	2.0	67.0	砂岩	SI142	SI142 No.15
【32】	4.1	4.3	3.4	68.0	結晶片岩	SI142	SI142 b 区
【33】	5.0	5.1	2.2	74.8	砂岩	SI142	SI142 c 区
【34】	8.0	3.1	2.5	94.8	結晶片岩	SI142	SI142 d 区
【35】	5.9	6.3	3.8	165.0	砂岩	SI142	SI142 b 区
【36】	8.2	4.8	3.2	188.2	砂岩	SI142	SI142 b 区
【37】	19.9	6.9	4.9	821.7	結晶片岩	SI142	SI142 No.36
【38】	5.5	3.9	0.9	31.7	緑泥片岩	SI143	SI143 b 区
【39】	13.3	12.8	2.0	467.5	緑泥片岩	SI143	SI143 No.24
【40】	15.4	5.3	4.6	592.7	結晶片岩	SI143	SI143 a 区
【41】	16.0	6.2	4.5	665.4	結晶片岩	SI143	SI143 No.26
【42】	5.3	4.5	1.5	51.9	緑泥片岩	SI144	SI144 s 区
【43】	12.4	8.4	5.7	790.8	結晶片岩	SI145	SI145 No.3
【44】	14.6	6.2	3.5	467.6	結晶片岩	SI145	SI145 No.2
【45】	15.6	5.5	4.7	728.1	砂岩	SI145	SI145 w 区
【46】	15.5	6.7	5.2	748.9	結晶片岩	SI145	SI145 No.11

番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石質	遺構	出土位置
【47】	13.8	8.4	4.8	783.2	凝灰岩質	SI145	SI145 No.9
【48】	18.0	7.7	4.0	873.4	結晶片岩	SI145	SI145 No.13
【49】	4.5	2.2	1.2	17.9	砂岩	SI147	SI147 一括
【50】	13.3	4.7	2.4	212.1	結晶片岩	SI148	SI148 No.1
【51】	21.0	5.3	4.5	758.8	結晶片岩	SI148	SI148 No.2
【52】	13.7	4.7	2.5	211.5	結晶片岩	SI151	SI151 No.14
【53】	18.0	6.7	2.7	431.0	結晶片岩	SI151	SI151 No.13
【54】	9.4	5.7	1.4	92.0	結晶片岩	SI153	SI153 No.13
【55】	10.6	5.0	1.5	120.0	結晶片岩	SI153	SI153 No.19
【56】	9.0	4.8	2.6	185.2	結晶片岩	SI153	SI153 No.20
【57】	11.7	6.2	2.5	255.2	結晶片岩	SI153	SI153 No.17
【58】	13.4	5.4	2.4	280.0	結晶片岩	SI153	SI153 No.14
【59】	13.8	5.2	3.3	318.0	結晶片岩	SI153	SI153 No.15
【60】	13.3	5.3	3.3	361.3	結晶片岩	SI153	SI153 No.16
【61】	15.3	7.1	2.3	371.3	結晶片岩	SI153	SI153 No.12
【62】	13.9	5.8	5.5	595.8	結晶片岩	SI145	SI145 No.4
【63】	13.6	8.0	5.3	784.4	結晶片岩	SI145	SI145 No.10
【64】	12.3	8.4	3.5	555.8	結晶片岩	SI145	SI145 No.8
【65】	〈7.2〉	〈7.6〉	〈4.3〉	〈250.3〉	結晶片岩	SI145	SI145 No.7
【66】	12.3	6.4	5.2	592.9	結晶片岩	SI145	SI145 No.5+6（接合）

作業風景（南西から）

第Ⅳ章　まとめ

秋山諏訪平遺跡Ｈ地点の調査では、住居跡 27 軒を検出した。時代別では、古墳時代後期 23 軒、奈良時代２軒、平安時代２軒である。古墳時代後期を中心に、奈良・平安時代まで継続した集落跡といえよう。ここでは、大規模発掘の成果をまとめた宮本（2010）を参照しながら、１）時期区分と集落の変遷を示し、２）出土した特徴的な遺物である鈴付高坏と編物石を取り上げて、まとめとしたい。

１　時期区分と集落の変遷

古墳時代後期は５期に区分される。

Ⅰ期は、遺構が検出されなかった。これまで秋山諏訪平遺跡では検出されておらず、秋山大町遺跡と秋山大町東遺跡で確認されていた。口端に明瞭な面取りをして、身が深く、口縁部が直線的に立ち上がる蓋模倣坏を主体とする。口縁部外面に段を持ち、球胴を呈する壷や、胴部に張りがあり丸みを帯びた甑や甕を伴う段階である。５世紀末と考えられる。これまでに確認された住居跡は多くない。集落の形成は穏やかだったことが指摘されている。

Ⅱ期は、第 136･148 号住居跡の２軒が該当する。また、第 150 号住居跡も含まれる可能性がある。Ⅰ期と同じく蓋模倣坏を主体とするが、口端部の面取りがなくなり、口縁部の立ち上がりは外反傾向のものを含む。鉢、蓋模倣坏に脚部が付くタイプの高坏が現れる。鉢は丸底で口縁部が外反するものである。甕はやや長胴化するが球胴の範囲にある段階である。５世紀末～６世紀初頭と考えられる。藤岡産の須恵器が多く伴出する時期と指摘されており、第 135 号住居跡から出土した鈴付須恵器もこの傾向を反映したものだろう。住居跡はいずれも谷部側の緩斜面に位置し、東に主軸を取る。

Ⅲ期は、第 135・143・151 号住居跡の３軒が該当する。Ⅱ期と同じく蓋模倣坏を主体とするが、口縁部の立ち上がりに外反傾向を示すものが多く、鉢がⅡ期より大型化する段階である。６世紀前半と考えられる。住居跡はいずれも谷部に位置し、一辺４ｍ未満の小型で、北に主軸を取っている。

Ⅳ期は、第 132・133・140・142・145・147・153 号住居跡の７軒が該当する。Ⅲ期と同じく蓋模倣坏を主体とするが、身が浅く、口縁部の外反傾向が顕著となる。新たに有段口縁坏が加わる段階である。６世紀後半と考えられる。住居跡は台地から谷部まで全体に展開する。

Ⅴ期は、第 155 号住居跡の１軒が該当する。坏が小型化し、蓋模倣坏から有段口縁坏が主体となる段階である。ただし、有段口縁坏が主体となる遺構は検出されなかった。

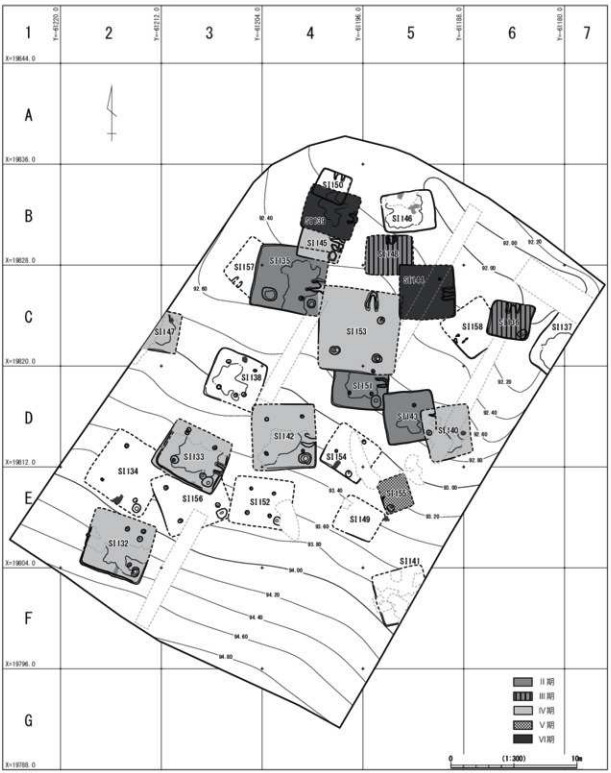
このほか、Ⅳ～Ⅴ期に蓋模倣坏と置き換わっていく有段口縁坏や、奈良・平安時代に認められる北武蔵型坏が遺跡からほとんど出土しなかったことから、細別時期まで示せなかった遺構検出面の浅い第 134・137・141・146・149・152・154・156・157 号住居跡などは、古墳時時代後期のⅣ～Ⅴ期に該当し、６世紀後半～７世紀前半に収まる可能性が高いと考えられる。

奈良時代は、第 139・144 号住居跡（Ⅵ期）の２軒が該当する。身の深い丸埦形態の北武蔵型坏と、胴部最大径よりも口径が大きくなる弓状口縁部形態の武蔵型甕が認められる段階である。８世紀前半と考えられる。

平安時代は、第 158 号住居跡（Ⅷ～Ⅸ期）の１軒が該当する。また、第 149 号住居跡も含まれる可能性がある。９世紀代の須恵器高台付埦が出土している。

既報告では、秋山諏訪平遺跡・秋山大町遺跡・秋山大町東遺跡の総体的な動向として、Ⅱ期に最も

多くの住居跡が集計されたことから、爆発的ともいえる増加で集落が急激に展開して最盛期を迎え、Ⅲ期以降減少傾向にあると指摘されてきた。しかし、今回の調査では、同じような傾向は窺えず、Ⅱ期に集落が形成され、Ⅳ期に集落が拡大していることが窺われた。既報告の集計も、個別の遺跡で住居跡の増減をみると、秋山大町遺跡・秋山大町東遺跡で住居跡が減少するⅡ期からⅣ期には、秋山諏訪平遺跡で住居跡が増加する傾向を確認できる。本書でも、この傾向が再確認されたと言えよう。



第 73 図　遺構変遷

2　特徴的な遺物

（1）鈴付須恵器

第 135 号住居跡から鈴付須恵器が出土した。高坏の脚部を閉塞して陶丸を入れたと思われる鈴付高坏である。閉塞した底部には外面から 6 つの孔が穿たれている。法量は残存高 3.7cm、底部径 8.2cm である。4 方透かしとみられる脚部は小さく、ミニチュアの可能性もある。また、脚部の裾が外側に開き、胎土に結晶片岩と海綿骨針化石が認められることから、藤岡産と推定される。須恵器の形態的特徴と、住居跡から出土した土師器坏類から推定される宮本編年Ⅱ期、5 世紀末から 6 世紀初頭と想定する遺構の年代は、概ね整合的と言えよう。

隣接する秋山大町遺跡では、一辺 10 m以上の大型住居跡や、須恵器大甕・子持勾玉とともに、実はここでも鈴付須恵器が出土していた。第 8 号住居跡から出土した鈴台付高坏である。坏部の下に膨らみを設けた胴部の内部には、鳴子として小礫を入れていた。胴部には方形の透孔を二段 6 箇所設け、3 方透かしの脚部を張り付けている。法量は残存高 4.6cm である。胎土から尾張産かと推定される搬入品である。住居跡は、土師器坏類の特徴から宮本編年Ⅰ期、5 世紀末と位置付けられている。

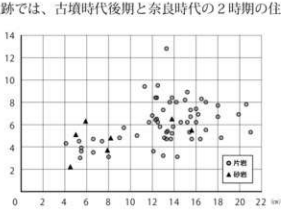
器体の内外に鈴を付加した鈴付須恵器の出土例は、全国的にも極めて少ない（柴垣 1987、山本 1991、光江 1991、野末 1995、入江 2015、原編 2021）。特に関東での出土例は僅かである。具体的には、千葉県大山台遺跡の鈴台付須恵器や、群馬県黒井峯遺跡の二重廻が挙げられるに過ぎない。また、最近になって、「甲を着た古墳人」が出土した群馬県金井東裏遺跡群の祭祀遺構から二重廻と鈴付高坏が報告されている（藤野 2021）。金井下新田遺跡の高坏は脚部を円盤で閉塞する形態だが、塞いだ底部に透かしが穿たれていない。

関東地方の鈴付須恵器は、いずれも古墳ではなく、集落から出土している点に特徴がある。朝鮮半島で生まれた鈴坏は祭祀用の特殊器で、「酒を供酌する前に振って音を出し、神や霊魂を招く、いわゆる招魂をなしたものと考えられる」と解釈されている（金 1979）。東国の鈴付須恵器が集落の営みのなかでどのように用いられてきたのか、興味ある課題である。

（2）編物石

秋山諏訪平遺跡周辺では、いわゆる編物石が住居跡からまとまって出土することが注目され、報告書に記載されてきた。本書でも、第 145 号住居跡の南西隅から 9 点以上がまとまって出土する事例を報告した。住居跡は古墳時代後期、宮本編年Ⅳ期、出土遺物は少ないが 6 世紀後半と考えられるものである。編物石の石質はすべて結晶片岩で、法量は破片を除いて長さ 12.3 ～ 13.9（平均 13.4）cm、重量 555 ～ 790（平均 693）g である。東京都中田遺跡では、古墳時代後期と奈良時代の 2 時期の住居跡からまとまった量の出土があり、時期差による特徴が指摘されている（小坂井編 2012）。また、これを対象とした民俗資料との比較も進められている（原・福田 2016）。ここでは住居跡から出土した使用時の形状をほぼとどめていると考えられる編物石 66 点を抽出し、写真を図版で掲載している。

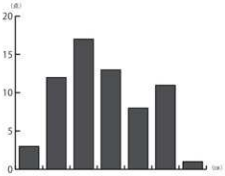
抽出した編物石のうち、明らかに欠損している【65】以外の長さ・幅・厚さ・重さを計測し分布を図示した（第 74 ～ 76 図）。



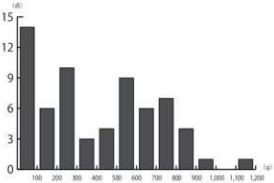
第 74 図　編物石（長さ・幅）

編物石の長さは 4.1 ～ 21.0㎝、幅は 2.2 ～ 12.8㎝、厚さは 0.6 ～ 6.0㎝、重さは 17.2 ～ 1,150.0g である。資料が少ないこともあり、分布やグラフからは明確な傾向や法則性を導くことは難しい。大きさと重さから想定できることは、人が片手で何度も持ち上げたり下ろしたりが、容易であるということである。

本調査で抽出した 66 点のうち、結晶片岩が 52 点、緑泥片岩が 7 点、砂岩が 7 点であった。片岩は角がやや取れた直方体や三角柱に近い形状を持ち、摂理の方向に長辺を持つ。砂岩は角が取れ丸みを帯びている。秋山諏訪平遺跡の北には、小山川が流れており、現在でも同じ大きさの結晶片岩を拾うことができる。【5】・【10】・【18】・【57】などからは、長辺の側面に、紐がひっかけるような窪みが 1 ～ 2 か所確認でき使用痕跡が窺える。【39】のように三角形で、三辺に紐を巻けるような窪みを持つ形状のものもある。編物石の形・大きさ・重さで用途が異なっていたのではないだろうか。



第 75 図　編物石（厚さ）



第 76 図　編物石（重さ）

＜参考文献＞（刊行年順）

金元龍　1979「鈴环」『世界陶磁全集 19　韓国古代』小学館：297

柴垣勇夫　1987「特殊須恵器の器種と分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』 6　愛知県陶磁資料館：11-26

山本哲也　1991「鈴台付須恵器のレプリカ製作と推定復元」『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅳ―古墳時代特集―』財団法人君津郡市文化財センター：57-70

光江章　1991「鈴付須恵器の一例―千葉県木更津市大山台遺跡出土の鈴付須恵器―」『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅴ―設立 10 周年記念論集―』財団法人君津郡市文化財センター：105-117

野末浩之　1995「特殊須恵器の器種と特徴」『装飾須恵器展』愛知県陶磁資料館：73-77

宮本久子　2010「調査のまとめと成果」宮本久子編 2010『秋山大町東遺跡・秋山諏訪平遺跡Ⅲ―D・E・F 地点の調査―』（本庄市遺跡調査会報告書第 37 集）本庄市遺跡調査会：290-308

小坂井孝修編　2012『中田遺跡Ⅱ』（東京都埋蔵文化財センター調査報告第 273 集）東京都埋蔵文化財センター

入江文敏　2015「特殊須恵器の分布とその背景―若狭・越から出土する器種を中心にして―」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』：57-77

原雅信・福田貫之　2016「遺跡から出土するいわゆる「編物石」について」『群馬文化』327　群馬県地域文化研究協議会：82-87

原佳子編　2021『鈴―よみがえる古墳時代の響き―』（第 30 回特別展）　かみつけの里博物館

藤野一之　2021「金井下新田遺跡出土須恵器の基礎的考察」小島敦子・原雅信編『金井下新田遺跡　古墳時代以降編』（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 684 集）：467-480

写真図版

本庄市マスコット
はにぽん

1　遺跡全景（南から）

図版 2

1　遺跡遠景（南東から）

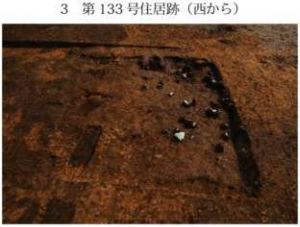
2　遺跡遠景（北東から）

1　第 132 号住居跡（東から）

2　第 132 号住居跡遺物出土状況（東から）

3　第 133 号住居跡（西から）

4　第 133 号住居跡カマド（西から）



5　第 133 号住居跡遺物出土状況（西から）

6　第 133 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（西から）

7　第 134 号住居跡（北から）

8　第 135 号住居跡（西から）

図版 4

1　第 135 号住居跡遺物出土状況（西から）

2　第 135 号住居跡遺物出土状況（南から）

3　第 135 号住居跡カマド遺物出土状況（西から）

4　第 136 号住居跡（南から）

5　第 136 号住居跡カマド（南から）

6　第 136 号住居跡遺物出土状況（南から）

7　第 136 号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況（南から）

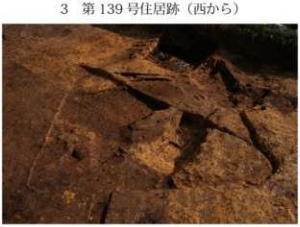
8　第 136 号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（西から）

1　第 137 号住居跡（南から）

2　第 138 号住居跡（南から）

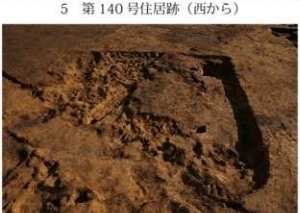
3　第 139 号住居跡（西から）

4　第 139 号住居跡カマド（西から）

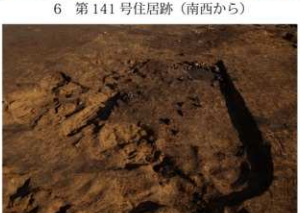


5　第 140 号住居跡（西から）

6　第 141 号住居跡（南西から）



7　第 142 号住居跡（西から）



8　第 142 号住居跡遺物出土状況（西から）

図版 6

1　第 142 号住居跡遺物出土状況（南から）

2　第 143 号住居跡（西から）

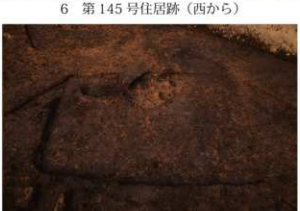
3　第 143 号住居跡遺物出土状況（西から）

4　第 144 号住居跡（西から）

5　第 144 号住居跡カマド遺物出土状況（西から）

6　第 145 号住居跡（西から）

7　第 145 カマド号住居跡遺物出土状況（西から）



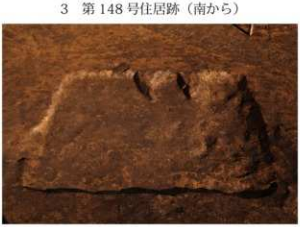
8　第 146 号住居跡（南から）

1　第 147 号住居跡（南から）

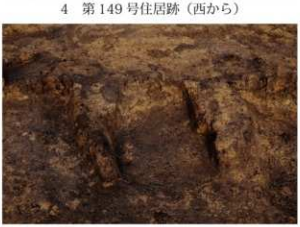
2　第 147 号住居跡カマド（南から）

3　第 148 号住居跡（南から）

4　第 149 号住居跡（西から）



5　第 150 号住居跡（南から）



6　第 150 カマド号住居跡（南から）

7　第 151 号住居跡（西から）

8　第 151 号住居跡カマド遺物出土状況（西から）

図版 8

1　第 152 号住居跡（西から）

2　第 153 号住居跡（南から）

3　第 153 号住居跡カマド（南から）

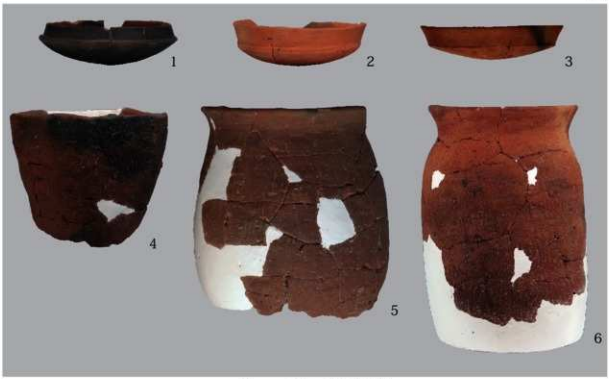
4　第 154 号住居跡（北から）

5　第 155 号住居跡（北から）

6　第 156 号住居跡（北から）

7　第 157 号住居跡（北から）

8　第 158 号住居跡（北から）



1　第 132 号住居跡出土遺物

2　第 133 号住居跡出土遺物

1　第 134 号住居跡出土遺物

2　第 135 号住居跡出土遺物（1）

1　第 135 号住居跡出土遺物（2）

2　第 136 号住居跡出土遺物

1　第 138 号住居跡出土遺物

2　第 139 号住居跡出土遺物

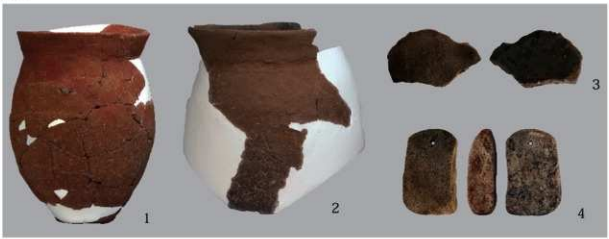
3　第 140 号住居跡出土遺物

1　第 142 号住居跡出土遺物

2　第 143 号住居跡出土遺物

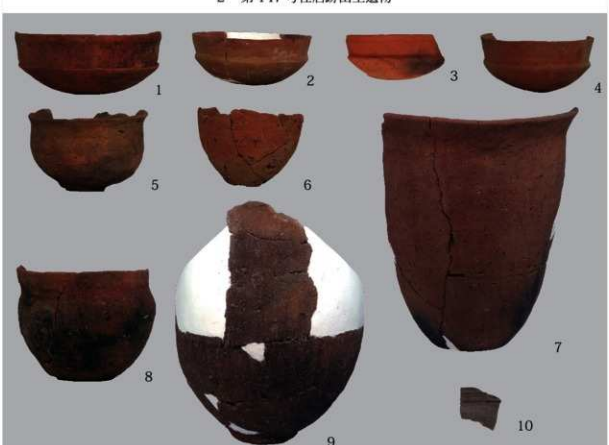
3　第 144 号住居跡出土遺物

4　第 145 号住居跡出土遺物



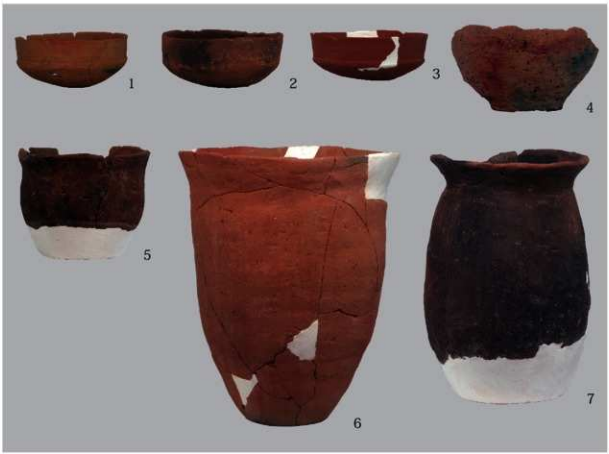
1　第 146 号住居跡出土遺物

2　第 147 号住居跡出土遺物



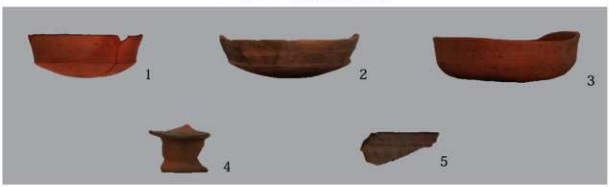
3　第 148 号住居跡出土遺物

1　第 149 号住居跡出土遺物

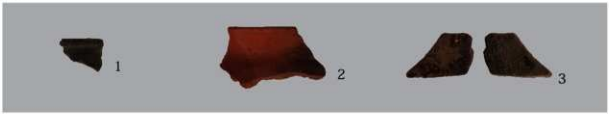


2　第 151 号住居跡出土遺物

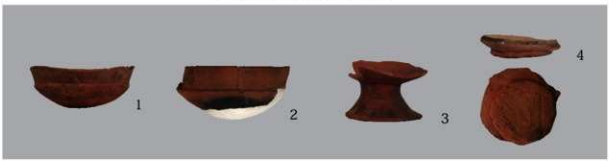
3　第 152 号住居跡出土遺物



4　第 153 号住居跡出土遺物



1　第 154 号住居跡出土遺物



2　第 155 号住居跡出土遺物

3　第 157 号住居跡出土遺物

4　第 158 号住居跡出土遺物

5　遺構外出土遺物

1　編物石（1）

【19】
【20】
【21】
【22】
【23】
【24】
【25】
【26】
【27】
【28】
【29】
【30】
【31】
【32】
【33】
【34】
【35】
【36】
【37】
【38】
【39】
【40】
【41】
【42】
【43】
【44】

1　編物石（2）

1　編物石（3）

報告書抄録

フリガナ	アキヤマスワダイライセキ５		
書名	秋山諏訪平遺跡Ⅴ		
副書名	Ｈ地点の調査		
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第68集
編集者	坂下貴則		
編集機関	本庄市教育委員会		
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄三丁目５番３号　℡ 0495-25-1185		
発行日	西暦 2022 年（令和４年）３月 29 日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地		コード 市町村	コード 遺跡	北緯 (度分秒)	東経 (度分秒)	調査期間	調査面積	調査原因
秋山諏訪平遺跡 Ｈ地点	本庄市児玉町秋山字大町 669-4、670-1 の一部		112119	54-044	36°10′36″	139°09′11″	2021.10.04 ～ 2021.12.21	1,336㎡	変電所 建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代	住居跡 27 軒		土師器・須恵器・石製品		・古墳時代後期の集落跡 ・鈴付須恵器		

本庄市埋蔵文化財調査報告書第 68 集

秋山諏訪平遺跡 V

－H 地点の調査－

令和 4 年 3 月 29 日　印刷
令和 4 年 3 月 29 日　発行

発行／本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号

印刷／関東図書株式会社